

『月暈とメスシリリнда』

脚本 四方田直樹

■登場人物

平良ツグオ(31)

たいらつぐお。主人公。平良家の次男。ツグオ

橘真澄(28)

たちばなますみ。「株式会社たいら」の契約社員。真澄

平良弘子(58)

たいらひろこ。ツグオたちの母。弘子

平良和夫(35)

たいらかずお。平良家の長男。和夫

平良あかり(25)

たいらあかり。平良家の長女。あかり

平良涼子(36)

たいらりょうこ。和夫の妻。涼子

久保田深雪(31)

くぼたみゆき。「株式会社たいら」の社員。深雪

平良さつき(53)

たいらさつき。「株式会社たいら」の現社長。ツグオの叔母。さつき

平良学(21)

たいらまなぶ。「株式会社たいら」の社員。さつきの長男。学

宮下輝美(52)

みやしたてるみ。「株式会社たいら」の社員。輝美

宮下信雄(49)

みやしたのぶお。輝美の夫。信雄

荒井健太(30)

あらいけんた。ツグオの友人。荒井

中村孝志(26)

なかむらたかし。あかりの同僚。中村

新保大輝(33)

しんぼたいき。「株式会社たいら」の取引先の社員。新保

6月中旬の火曜日。20時頃。

名古屋、平良あかりの職場近くの路上。

あかり、残業の夜食を買いにコンビニに行った帰り。手におにぎりなど入ったビニール袋。

あかり、兄のツグオと電話をしている。

あかり 私はどうなんだって言われちゃうじゃない。「お母さん思いのツグオにくらべてあかりは薄情な子だなあ」って。

あかり 全然帰ってこなかったくせに。ちよくちよく帰ってるのは私のほうなんだから。

あかり 考えたんだから。私だって、少し休職してもどううかって。でもゴールデンウィークに帰ったときに思ったんだ。涼子さんもいるし、そばにいるだけがお母さんのためじゃないって。薄情とか言われる筋合いはないんだから。

中村孝志がやってくる。コンビニでアイスコーヒーを買って職場に帰るところ。

中村、あかりに気がつき立ち止まり、あかりの電話が終わるのを待つ。

あかりはまだ中村に気がつかない。

中村、ふと空を見ると月が出ている。暈(かさ)のかかった月。

あかり 仕事やめちゃって。おにいちゃんのバカ。バカ。

あかり 私はこれからまだまだ仕事なのがいい気なもんね。

あかり、中村に気がつき、手を軽くあげて挨拶。

あかり それじゃあお兄ちゃん。仕事戻るから、詳しくは今度帰省したときに聞くから。また。

あかり、電話を切る。

あかり 中村君もコンビニ...

中村 はい。

あかり 兄貴だったんだけど。

あかり、携帯電話を中村に見せる。

あかり 上に二人いて下の兄貴。末っ子なのよ私。

中村 見えないっすね。

あかり 何見てたの？

中村 はい？

あかり、中村がさつき見ていた方を見る。

あかり ああ。月か。

中村 ああ。はい。

あかり 満月なのにもつたいないね。もやっとしてる。

中村 明日雨ですかね？

あかり なんで？

中村 いいませんか？」月に暈がかかると雨が近い」って。

あかり しらない。

中村 あれ。

あかり 中村君ておじいちゃんだよね。

中村 おじいちゃんじゃあないですよ。

あかり 明日の雨より明日の会議が心配だわ私。

中村 確かに。

二人、去る。

転。

6月中旬の水曜日(1の翌日) AM7時50分頃。

長野県の南部にある人口10万人ほどの街で菓子問屋を営む「株式会社たいら」本社兼、物流倉庫。

本社と同じ敷地には平良ツグオの実家もあり、ツグオの母と兄夫婦が住んでいる。

「株式会社たいら」はツグオたちの父親が経営していたが12年前に亡くなったあとはツグオの父の実妹である平良さつきが経営をしている。従業員はアルバイト、派遣社員を含めて5名ほど。

三階建ての倉庫の一部(二階の一部)に事務所があると言う感じ。

舞台はその事務と、その隣室である応接室。

応接室へは事務所とつながる入口と、給湯室側の廊下から入れる入口がある。

応接室は終業後、従業員の懇親のための場(多くの場合、飲食の会場)として解放されており、焼酎やウイスキーの瓶がちらほらと棚に並んでいたりもする。

掃除中の宮下輝美と橋真澄のところに平良涼子がもったというブーゲンビリアの鉢植えを持って来たというところ。

平良学は廊下を掃除中。

輝美(手に雑巾を持っている)と涼子ブーゲンビリアを事務所のどこに置くか決める。

真澄、少し離れたところで机を雑巾がけしている。

涼子 ニー。どうです？

輝美 そうね。うん。

涼子、手に小さめのじょうろを持ち、

涼子 お水。どれくらいあげたらいいだろう？

輝美 橋さんどう？

真澄、鉢植えに近づき、葉っぱを触りながらじつとみる。

真澄 3センチリットルくらいいいじゃないですか？

涼子 そんなにはつきり？

真澄 まあ、だいたいでもいいと思いますよ。

涼子 そう？

輝美 せっかくだから。橋さん、ちゃんとほかってよ。

真澄、自分の机からコップを持ってくる。

真澄、涼子からじょうろを受け取り、コップに適当にそそぐ。(おっに見えてきつちり320ミリリットル注いでいる)

真澄 はい。320ミリ。

涼子 ほんとに？320ミリ？

真澄 まあだいたい。

輝美 あれで見せてあげなよ。

涼子 なに？

輝美 計るやつ、なんてったっけ？オスメス

真澄 メスシリンダー。

輝美 そうそう。

真澄、自分の机の引き出しからメスシリンダーを取り出し持ってくる。

涼子 ああ、みたことある理科の時間。

真澄、メスシリンダーにコップの水を注ぐ。
メモリをじっと見る輝美と涼子。

涼子 320ミリリットル。おお。

輝美 ね。すごいでしょ？

涼子 へー。

真澄、メスシリンダーの水をブーゲンビリアに水やりする。
廊下から平良弘子と平良ツグオの声が近づいてくる。

弘子 もう会社はウチのじゃないんだからね。

ツグオ あーうん。

弘子 なんで先に連絡よこさないんだか。(学に気がつき)学君おはよう。

学、軽く会釈。そして、ツグオに気がつく。

学 あれ？

ツグオ ?あー学?でかくっていかむさくなつたな。

弘子とツグオ、部屋に入ってくる。

弘子 おはようございます。

輝美 おはようございます。

真澄 おはようございます。

涼子 お義母(かあ)さん。

弘子 あれ？涼子さんなんで？

涼子 お義母さんにいただいたブルーゲンピリア。

弘子 ああ。きれいでしょ。これ染井さんにもらったの。

輝美 (ツグオを見て)あれ？ツグオ君？

ツグオ おはようございます。

涼子 あら。

ツグオ ごぶさたです。義姉さん。

涼子 ははは(ねいさんと呼ばれるのがこそばゆい)。いつ帰ってきたの？

ツグオ 今さっき。

涼子 こんなに早く？あ、深夜バス。

弘子 輝美さん、さつきちゃんは？トイレ？

弘子、廊下に出てトイレに向かおうとする。

輝美 社長は今日は銀行寄ってどうだろ？帰ってこないかも？

弘子戻ってくる。

弘子 ええ？引越し屋がくるのに。何も連絡なしに。困っちゃうわよね。

涼子 何？え？

弘子 三階のツグオの部屋って今どうなってるんだっけ？

輝美 三階の？

弘子 輝美さん覚えてない？高校のときツグオ、上の部屋使ってたでしょ？

輝美 え？…。ああ。そういえば！そうでしたね。

真澄 物置みたいになってますけど。

弘子 荷物入るかな？トラックいっぱいでしょ？

ツグオ 軽トラだよ。赤帽だもん。

弘子 にしたってあるんでしょよ。ベッドやら冷蔵庫やら洗濯機やら

ツグオ ベッドは捨てたよ。

弘子 アパート引き払って来たんだって言うのよ。で、屋には引越し屋が荷物持ってくるんだってよ。

涼子 え？えっと。え？帰ってきたの？

ツグオ ははは。

涼子 帰省じゃなくてずっと？仕事は？

弘子 やめたんだってよ。馬鹿だよね。真澄ちゃん。これウチのバカ息子。ツグオ。

真澄 橋です。

ツグオ 平良ツグオです。

真澄 (ツグオの頭上を見ながら)……288ミリ。

ツグオ え？

真澄 え？いえ。和夫さんの弟さんですか？

涼子 そう。

弘子 次男だからツグオなの。アハハ。彼女、輝美ちゃんの後任、なのよね？

輝美 ええ。

ツグオ え？輝美さんやめちゃうの？

輝美 そうなの。

弘子 あんたとは違うのよ。輝美さんはやりたいことがあって辞めるんだから。

ツグオ え？なに？

輝美 ふふふ。

弘子 喫茶店やるのよね。

輝美 弘子さんいつちやうの(笑)？

弘子 あ、ないしよだった？アハハ。

輝美 弘子さんったら。アハハハハ。

廊下においてあるタイムカードが押された音がする。「ガッガッ」
久保田深雪が出社してくる。

深雪 おはようございます。すみません。掃除すぐ手伝いますね。

ツグオ !

弘子 深雪ちゃん。

深雪 はい？あれ、弘子さん？

ツグオ、見を隠すように部屋のすみへ行こうとする。

深雪 !

ツグオ ……。

弘子 こっち深雪ちゃん。これ、ウチのバカ息子、ツグオって言うの。あれ？知ってる？ん
だっけ？あれ？

輝美 やだ弘子さん、深雪ちゃん、ツグオ君と同級生でしょ？ねえ？

弘子 そうだそうだ。深雪ちゃん、ツグオと付き合ってたのよ。私、大好きで。それでその
ままウチに来てもらっちゃったのよ…ああ、そうだった。

ツグオ ……ご無沙汰しました。

深雪 ……

深雪の携帯電話がなる。

深雪 (弘子に)すみません。

深雪、電話に出る。

深雪 おせわになっております。久保田です。どうも。あれですよねこの間の。え？ありますよ？「DMX 輪ゴム」。ハハハ。そうそう輪ゴムのリリアン。出ますね。

弘子 深雪ちゃん。ごめんごめんね。私、すっかり忘れてた。

深雪、「いえいえ」と顔の前で手を振り、気にしないでとジェスチャー。
事務所の電話が鳴り、輝美が受話器をとる。

輝美 株式会社たいらです。お世話になっております。在庫ですか？じゃ確認して折り返しますね。

輝美、電話を肩で押さえながら。パソコン画面を見て電話対応を続ける。

真澄、ぞうきんを集めてバケツに入れる。

真澄、弘子と涼子に一礼して掃除道具をしまいに。こうとする。
学が「やりますよ」という感じで真澄から掃除用具を受け取り去る。

真澄 ありがとう。

真澄、席に戻る。

輝美 ちょっと、在庫みてくるね。

真澄 お願いします。

輝美、軽く片手を上げ、一階の倉庫に向かう。
株式会社たいら始業。という感じ。

涼子 もどりましたよっか？ツグオ君ごはんは？

ツグオ まだ。

弘子 みそ汁あっためるから。玉子焼きとか納豆しか無いわよ？

ツグオ 十分です。

弘子、ツグオ出てゆく。涼子、じょうろを持って輝美と真澄に手を振り出てゆく。
真澄、軽く礼。

深雪 金曜そっちの方周りますから、持って行きますよ。はい他と一緒に。七掛けです。

深雪、電話を切る。そして、ため息。

深雪 はあ。

真澄、深雪を見て。

真澄 4970ミリリットル。

深雪 ん？

真澄 久保田さんが今日する、ため息の総量。

真澄、電卓で計算を始める。

真澄 (一回のため息の量が約180ミリリットルだから) だいたい……27回。

深雪 えー。

電話が鳴る。

真澄と深雪が同時に手を伸ばすが深雪の方がつながる。

深雪 はい。株式会社たいらです。あーお世話になっております！久保田です。

転。

2と同日の夜。PM21時頃。

平良和夫と涼子が廊下を歩き向かってくる。

和夫は職場から帰宅したところ。作業着姿。

二人、腕をくんでいる。

和夫 あぶらげのやつ、おいしかった。

涼子 ほんと？じゃまた入れる。お弁当箱は？

和夫 台所置いといた。

二人、応接室の中をのぞき、明かりをつける。

和夫 応接室借りちやうか。

涼子 うん。

和夫 ツグオ呼んでくる。

涼子 うん。

和夫、三階に向かおうとする。

涼子が再び和夫に腕を絡ませる。

涼子 一緒にいく。

二人連れ添って三階へ

ツグオの部屋の前で

和夫(声) ツグオいいか？

ツグオ(声) おお。にいちゃんお帰り。

三人階段をくだり応接室へ入ってくる。

ツグオ、軍手を外しズボンのポケットへ(引っ越しの後片付け中だった)。

和夫と涼子は腕をくんだりはしていない。

ツグオ いつもこのくらい？

和夫 ん？

ツグオ 帰り。

和夫 ん、ああ。うん。

ツグオ そう。

和夫 もうちょっと早いかな。

ツグオ ん？
和夫 ああ。

応接室のイスにツグオ、ソファーに和夫と涼子が並んで座る。

ツグオ 変わりない？
和夫 ん？

和夫少し考えて

和夫 西友の
ツグオ スーパーの？市役所のことの？
和夫 隣にユニクロできた。

ツグオ え？あ、そうなんだ。へー。…兄さんと涼子さんは変わらず仲良さそうで。
涼子 そうよー。ふふ。

涼子、和夫の額をなでる。

和夫 母ちゃんのこと。
ツグオ あー。うん。昼間、涼子さんに(涼子を見る)だいたい。
和夫 いろいろ。なあ。

涼子 ん。話した。いろいろ考えて、セカンドオピニオンもやってくれる限り。で、放射線治療に決めたって。

ツグオ 何も知らなかったとはいえ、任せきりですんません。

涼子 言わなかったのはこっちなんだから。

和夫 段取り。

ツグオ ああ、母ちゃんが。

涼子 方向性決まってるからツグオくんとかかりちゃんにって。

ツグオ 週一で大病院行かなきゃなんだろう？俺、乗せてくよ。車、誰の借りれる？

涼子 私の使って。毎週だとやっぱり大変だから、交代でいこうよ。

ツグオ すんません。…出来るだけ俺、連れてくから。

涼子 そう？

和夫 こっち

ツグオ ん？

和夫 帰ってくるのか？

このあたりで事務所に平良さつきが荷物を置きにくる。

ツグオ とりあえず失業保険が出てる間かな。

涼子 あ、もらえるの。そりゃいいわ。

和夫 そうか。

ツグオ 失業保険出てるうちは「うちいるわ」。

涼子 お母さんの治療のほうが先終わるかな。

ツグオ よくなるにせよ悪くなるにせよ……いやいや

和夫 よくなるよ。

ツグオ わかってるよ。もちろんだよ。

さつきが応接室に顔を出す。

さつき どうも。

涼子 お借りします。

さつき どうぞ。夜は好きに使って。

涼子 どうしたんです？こんな時間に。

さつき 客先でつかまっちゃってさ。ツグ、ひさしぶり。

ツグオ ご無沙汰でしたさつきおばちゃん。

さつき 仕事辞めて帰ってきたんだって？

ツグオ うん、まあ。

さつき、冷蔵庫から発泡酒(缶にはマジックで「さつき」と書いてある)を取り出し、ツグオに渡す。

ツグオ お？

ツグオ、プルタブを開ける。

さつき、和夫と涼子にも缶を渡そうとする。

和夫 いい。俺。

涼子 おかまいなく。

ツグオ え？あけちゃったよ。

和夫 飲めばいいだろ。

ツグオ ……すいませーん。

ツグオ、ビールを飲む。

ツグオ あー。

さつき つまむ？駄菓子でよければ。

さつき、部屋の脇の賞味期限切れの駄菓子が入っている段ボールを持ってくる。

さつき へ。

ツグオ いいの？

さつき 賞味期限切れてるから。

ツグオ え？ああ。最近はそういうの厳しいんだやっぱり。駄菓子でも

ツグオ、箱の中の駄菓子を物色。

ツグオ あんず棒、さくら大根、ココシガ…

ツグオ、駄菓子をとり出しては物色。

ツグオ パッケージは変わってるけど結構変わらずやってたみんな。

さつき これからかな。いろいろ減って行くのは。

ツグオ、駄菓子の中からふ菓子の袋を取り出す。

ツグオ 杉田のふーちゃんだ。なつかしー！

ツグオ、袋をあけてふ菓子を食べ始める。

ツグオ うはは(これこれ)。東京じゃ売ってないんだよね。

ツグオ、駄菓子の袋の製造者住所を見て

さつき 買えるよ。

ツグオ え？どこで？

さつき アマゾン。

ツグオ ああ。

さつき ウチのホームページでも売ってる。

ツグオ うはは。

さつき あんだ、暇になるんでしょ？ちょっと手伝わっか？

ツグオ ええ？そんな余裕あんの？

さつき 輝美さん抜けるしさ、バイトくらいならな。

ツグオ 母ちゃん病院つれてく日は休める？

さつき いいよそんなの。といつか、週2か3でいいよ。

ツグオ あ、そうっじゃあ上に住まわせてもらっ家賃ぐらい働いて返そうかな。

(SE) 涼子の携帯電話の着信音。

涼子、電話に出る。

涼子 もしもし。すみません。今、会社の方にきてて。すぐ戻りますから。はいはい。

涼子、電話を切る。

涼子 お義母さんお風呂出たみたい。呼んでる(笑)

さつき (お風呂)出たら、誰もいないから。

涼子 もどらなきや。じゃ、ツグオ君、そういうことで。

ツグオ はい。

さつき まあ、せいぜい親孝行しな。

さつき、和夫、涼子去る。

涼子 寄ってきます？

さつき いい、いい。また根が生えちゃうから。帰る。

ツグオ、ビールを少し飲み、駄菓子を二つほど手に取る。

ツグオが部屋の明かりを消し、自分の部屋に去る。

転。

6月後半の月曜日、AM7時頃。

応接室に弘子と荒井健太がツグオを待っている。

弘子 そうか。ぶどうだった。荒井君ちは。お父さんも？

荒井 まだやってます。兄貴も。

弘子 あ、道の駅で見たことあるかも。名前。

荒井 そうっす。おいてます。生産者のとくに親父の名前のぶどう。

三階からツグオがシャツのボタンをとめながらやってくる。

ツグオ ごめんごめん。あれ？健太？

荒井 オウよ。帰って来てるって聞いたからさ。

ツグオ なんだよ。誰に聞いたよ？

荒井 和さん。

ツグオ 兄ちゃん！？

弘子 和と健太君、釣りに行ってたりしてるんだってよ。

ツグオ マジ？

荒井 出かけるんだって？

ツグオ そうなんだよ。ちょっと母ちゃんと約束してさ。早くに来てもらったのにわるい。

荒井 いや、一仕事終えたあとだから。

ツグオ マジか？

弘子 ちよっと。ボタン。

ツグオ え？

ツグオのシャツのボタンと穴が一つずつずれている。

ツグオ あ。

弘子 しょうがないねえ。

ツグオがシャツのボタンをかけ直す。

弘子がツグオのシャツの襟をたたく。

荒井 元氣そっす。

ツグオ 健太も。

弘子、ツグオが緩めに腰の下ではいているズボンに引っぱり上げ、ツグオの尻

をたたく。

ツグオ、弘子が上げたパンツを腰の下に下げる。

ツグオ カギ借りて来た？

弘子 え？

ツグオ 車。

弘子 ああ。

弘子、カギを取り出しツグオに渡す。

弘子 はい。

荒井 しばらく居るの？

ツグオ いるねえ。

弘子、ツグオの腕に自分の腕をからませる。

弘子 ごめんね荒井君。

荒井 いえ。また顔出します。

3人、応接室を出る。

ツグオ 子ども大きくなった？

荒井 こんど幼稚園。

ツグオ 早いな。

弘子 いいねえ。ウチはどうなんだろうね？

ツグオ 兄ちゃんとこまだそっつい感じじゃないの？

弘子 私、別にアンタでもいいんですけど？深雪ちゃんとはちゃんと話したの？

ツグオ ー。

弘子 ちゃんと謝った？

ツグオ ー。

弘子 もー。

荒井 いいね。相変わらず仲良くて。

3人去る。

転。

7月2日のPM15時くらい(ツグオが帰郷してから一月ほどのち)。
株式会社たいらの廊下。

買った物がえりの涼子と宅急便の送り状を取りに来た真澄が一瞬の立ち話。
涼子は麦わら帽子に夏っぽい格好。

涼子 暑いからカレーでしょ？

真澄 そうですね(笑)

涼子 余らせないにはどれくらい作ったらいい？

真澄 1.28リットルですね。

涼子 こまか。1.28リットルね1.28リットル。

真澄 最初に入れる水の量ですから。

涼子 オーケー。ありがとー。

涼子、去り、真澄事務所に向かう。

事務所

さつきは電話中。輝美は出荷する商品の宛名書きをしている。

深雪はパソコンで書類を作成している。

電話が鳴る。

輝美がとる。

輝美 新保さん。お世話さまです。え？ははは。わかりますよ。ちょっとまってね。

輝美、電話を保留にして深雪を見る。

輝美 深雪ちゃん。ヒロシゲの新保さん。

深雪 ああ。そっか。

真澄このあたりで帰って来て、輝美の作業に合流。

深雪、電話に出つつ、ディスクの上の卓上カレンダーを手にとり予定を確認。

深雪 どうも。明日午前中でしたよね？そうね夏休み入る前に7、8月の話しなくちゃ
ですよ。はい、うん。いつもすいません。うん。じゃ、お待ちします。

深雪、電話を切る。

学とツグオが配達から帰ってくる。

二人、廊下をAKB48のメンバーの名前を言いながら帰ってくる。
事務所に入ってくる二人。

ツグオ 松田、松田なんとか

学 松井じゃない？、SKEの

ツグオ あ、それかな。

学 松井珠理奈ね。じゃあ渚上舞

ツグオ それが合ってるのかどうかもわかんねえよ。

学 もどりました。

輝美 おかえりなさい。

真澄 おかえりなさい。

さつき ご苦労様。

ツグオ 行ってきました。

なんとなく深雪を見てしまっつツグオ。

深雪、なんとなく目をそらす。

輝美 何？

ツグオ これ。

ツグオ、アイドルの生写真くじの束を輝美に見せる。

輝美 ああ。学君詳しいでしょ？

ツグオ うん。

学 AKBは一般教養程度ですよ。

さつき 学、経費申請のデータ印の日付、去年になってるから。直して再提出して。

学 あ、はい、今日中に出し直します。

学、パソコンに向かう。

さつき だいぶ慣れた？

ツグオ 昔、親父にくつついて行った店とかさ懐かしいよ。なんかある？

さつき いや、今日は大丈夫。ありがと。

ツグオ それじゃ、すいません。お先失礼します！上にいくだけですけど。

輝美 アハハ。おつかれさま。

真澄 おつかれさまでした。

学 また。

ツグオ オウ。

ツグオ、軽く礼をして事務所を去り、応接室に向かい、冷蔵庫から自分のペットボトル

のドリンクを取り出し飲む。

事務所

真澄、宛名書きが終わる。

真澄 終わりました。

輝美 うん。じゃ、出荷準備いきましょっか。

輝美と真澄、立ち上がる。

輝美 一階倉庫いつてきまーす。

深雪 ゆう。パックもう呼びました？

輝美 なにか出すものある？

深雪 今作ってるので間に…いや大丈夫です。

輝美 わかりました。

応接室

ツグオ、東京の知人に電話をかける。

ツグオ もしもし。平良ですけど。どうも。え？(笑)そうですよ。うん。実家。いや、ほら、借りっ放しのあれ、送り先、聞く聞く聞いてなかったなって。(相手は仕事中華しい)あ、すいません。うん、メールで大丈夫なんで。悪いね仕事中に、今度は夜かける。いやいやいや。じゃあはい。

ツグオ、電話を切る。

事務所

さつき あのさ

深雪 別にツグオが居ようが居まいが関係ありませんから。

さつき 竹田のおばあちゃん腰やって入院してた。

深雪 あ、ああ。それで店休んでたんですか。

さつき よかったよ。香典なんてなったら赤字だったから。

深雪 そうですね(笑)社長、すいません。これからスーパー岡田さん行かなくちゃで。クレームで。

さつき あら。怒ってんの？

深雪 そこまでじゃないと思っんですけど。ちょっと話聞いてきますのであとで報告します。

さつき よろしく。

深雪、準備して去る。

応接室

ツグオの電話がなる。荒井健太からの着信。

ツグオ なによ健太？これから？いいけど？

ツグオ、応接室を出ようとする。

廊下で先を歩く深雪の姿を見つける。気がつかれないように身を少し隠し、やり過してから去る。

さつき (笑)何年もツグオのツの字も出なかったくせにさあ。

学 困るよね。

さつき 仕事好きだから。あれはあれくらいでいいだろ？

学 母さんは久保田さんに嫁に来てもらって俺と二人三脚で「たいら」をついでもらいたいのにね。

さつき 深雪がなに？あんたと結婚するって？…プツハハハ…なに？あんたそんなこと考えてんの？プ、ハハハハハハ。

学、立ち上がる。

学 トイレ。

さつき ああ、ゴメン、ゴメン…ハハハ…悪い悪い。

学、去る。

さつき、自分の湯のみでお茶を飲もうとして、お茶が無いのに気がつく。

さつき あーあ、ハハハ。そんな丸く収まるなら世話なしなんだけど(笑)。

さつき、給湯室に去る。

転。

同日のPM18時半くらい。

ツグオ、和夫、荒井が応接室にやってくる。

3人でキャッチボールをして来た帰り。グローブと野球ボールを持っている。

荒井 案外ノーコンじゃなかったね。久々の割に。

ツグオ ふっふふくん。

荒井 あっちじゃやってなかったの？
ツグオ あー結構肩にくるね。久々にやると。

応接室に入る3人。

和夫、冷蔵庫の上の貯金箱に600円を入れ、冷蔵庫から缶ビール（発泡酒）を取り出しツグオと荒井に一缶ずつ渡す。自らはソフトドリンク。

荒井 あざあす。

ツグオ 兄ちゃんは？

和夫 いいやこちで。

三人、スナック系の駄菓子をつまみに缶ビールを飲みはじめる。

荒井 はい。おつかれさま。

三人乾杯。

ツグオ 兄ちゃんと健太となんて不思議。

荒井 お前、帰ってこなさすぎなんだよ。何年帰って来てなかったんだっけ？

ツグオ 12年。

荒井 なんだよ12年で。赤ん坊が中学上がるぞ。

和夫 西友のところにユニクロできたの知らなかった。

荒井 まじすか。

ツグオ 知らねえよ。んなこと。

荒井 ヨシコ、バイトしてるんだぜ？ユニクロ。

ツグオ どこかヨシコ？

荒井 二組の

ツグオ 覚えてねえよ。

荒井 野島と結婚して離婚した。

ツグオ 野島はなんとなくわかる。あれ、でかいやつだよな？

荒井 ヨシコはお前のこと覚えてたけどな。

ツグオ あ、そう。

荒井 お前、女子に評判悪いんだよ。

ツグオ なんで？

涼子がお盆に枝豆をのせて持ってくる。

涼子 はい。枝豆おまち。

荒井 ありがとうございます。

涼子 200円。

荒井 500円でおつりあります？

涼子、腰につけた釣り銭袋からおつりを出す。

涼子 はい300円。和君、晩ご飯こち持つてくる？つまみにしちゃう？

和夫 いや、もどる。じゃ、健太再来週。

和夫、つりでリールを巻くようなジエスチャー。

荒井 あ、うす。

荒井、同様のポーズをしつつ軽く一礼。

涼子、和夫に腕組みし、二人去る。

ツグオ なんですよ？女子？

荒井 なんじゃねえだろ久保田深雪。

ツグオ ああ…。

荒井、冷蔵庫の上に置いてある貯金箱に400円を入れ、冷蔵庫から缶ビール(発泡酒)を2缶取り出す。

荒井、1缶をツグオに渡す。

荒井 何で帰って来たの？

ツグオ なあ。

荒井 そんなに悪いの？おばさん。

ツグオ ん？

荒井 言わねえから。だいたいわかるから。

ツグオ ああ。まあ。それはそうなんだけど。んー。

二人、缶を開け、飲む。

ツグオ ……仕事つまんなくってさ。右肩下がりの業種だったじゃん？

荒井 しらねえけど。

ツグオ ちょっと前なら3人でやってたことを一人で回すみたいなさ、でも売上はあがらねえ、なんとかしろって。楽しくなくなっちゃって。

ツグオ、ビールを飲む。

ツグオ で、母ちゃんのこと兄ちゃんから連絡あって。母ちゃんにかこつけて逃げてきたわけ。

荒井 なんだ。そっかあ。うん。それでよかったんだよ。おばさんよかったよ。
ツグオ そうかあ？そっかなあ？やってるっていやあ週一回の病院の送り迎えだけでさ。
荒井 十分じゃねえの？
ツグオ もう少し母ちゃんになんかするつもりで帰って来たんだけどな(笑)
荒井 そっか。

二人、ビールを飲み。枝豆をつまむ。

ツグオ なんかさ、昔ほどさ、ほら、はつきりしなくてさ、

荒井 何が？

ツグオ ほら、気持ちっていうかさ。「しょうがないよなあ」って思うことねえ？牛丼屋で後に来たやつの方が先に出て来たりするとムカつくけどしょうがないよな、店員一人で超忙しそうでもないとか。

荒井 ああ。

ツグオ 昔だったら母ちゃん死んじゃうなんて超いやじゃん。

荒井 今だってやだよ。

ツグオ やだよ。やだけどさ。しょうがないよなあみんなつか死ぬんだしって思いもし
ちやうんだよね。

荒井 うん。

ツグオ 何かしようにも医者でもねえし、金もねえし。送り迎えくらいしかできねえし。それでも、そういうもんなんだなあーって思っちゃって。

荒井 うん。

ツグオ しょうがないことなんだけど。しょうがないって言うていいのか？

荒井 うん。

ツグオ お前が泣くなよ。

荒井 うん。

荒井、にじんだ涙をさつと拭いビールを飲み干す。

荒井 もう少し飲むか？

ツグオ いいけど？

荒井、財布を出して、貯金箱に400円を入れ、発泡酒を2缶とりだす。

二人、缶のプルタブを開け、乾杯。
ビールを飲む。

転。

その深夜。

同、応接室。

ツグオが酔いつぶれて寝ている。

荒井は既に帰宅。

弘子がビールの空き缶などを片付けている。

弘子、ツグオを揺する。

弘子 ツグ。ツグ。上に行って寝なよ。

ツグオ、起きない。

弘子 やれやれ。

弘子、応接室を出、毛布を持って戻ってくる。

弘子、ツグオに毛布をかける。

弘子、ソファーに座りツグオを見る。

和夫がやってくる。

弘子 ご苦労様。荒井君大丈夫だった？

和夫 御礼にぶどうもらった。

弘子 あら。

和夫 ツグオ。

弘子 このまま戻って来る気なのかな？

和夫 ？

弘子 ツグオ。もうあつちに帰らない気なのかな？

和夫 聞けば？

弘子 ええ？やだよ。「母ちゃんがそういうなら残ろうか」とか。あたしのせいにされそ
うだもん。さて。

弘子、立ち上がる。

弘子 二階も億劫になってきちゃった。

和夫がしゃがみおんぶのポーズ。

弘子 えっおんぶ？

和夫 ん。

弘子 いいわよ。頭うつちやいそう。降りれるって。大丈夫。

和夫、立ち上がる。

和夫 いや。

和夫、改めてしゃがみおんぶさせると主張。

弘子 しょうがないなあ。

弘子、和夫におんぶしてもらおう。

弘子 ありがとう。

和夫、弘子をおぶり去る。

弘子(声) 天井気をつけて！

翌朝。

株式会社たいらの事務所は就業時間。

自らの席でパソコンに向かうさつきと真澄。深雪。

応接室ではツグオがソファでだらしなく寝ている。

事務所に新保大輝がやってくる。

新保 まいどろ。お世話になってます。

深雪 いらっしやいませ。

真澄 いらっしやいませ。

さつき ああ。いらっしやい。商談？

深雪 はい。

さつき いつも悪いね。来てもらうちやっつて。

新保 いやあ、夜もちよいちよい寄せせてもらってますから。飲みに。

さつき みたいだね。

新保 いいですよ。終業後に会社で飲んでいいなんて。

さつき 大して出せてないから。すくない給料を手エーンの飲み屋に払うくらいなら「リ」で飲めって。ねえ。

新保 うちも見習ってほしいです。

深雪 ちょっと応接室使いますね。

深雪、自分の席に戻り手帳とファイルを手にもつ。

真澄 お茶がいい？コーヒー？

深雪　ありがとう、コーヒーでいいですよね？
新保　はい。こちらで入れていただくコーヒーはほんとおいしいから。
真澄　あとで持ってゆきます。

深雪、新保をつながして応接室に向かう。

さつき　輝美さんいなくなったらコーヒーっていう人減るだろうね。

輝美　大丈夫です。ちゃんと伝授して行きますからね。

真澄　よろしくお願いします。

二人、去る。

深雪　先週どうでした？コース。

新保　それが行けなくなっちゃって。

深雪　あれ。

二人、応接室に入り、寝ているをツグオに遭遇する。

深雪　……………

新保　あれ使用中？ですか？

深雪、大きくため息をついたのち、ツグオを起す。

深雪　ツグオさん。ツグオさん。

ツグオ、目を覚ます。

ツグオ　はひ？

深雪　お休みのところすいません。ちょっとここ使うので三階のほうにうつっていただいて
もよろしいですか？

ツグオ　深雪！

ツグオ、飛び起きる。

ツグオ　深雪、ああ。ごめん！

深雪　いいですか移動してもらって。

ツグオ　10年以上音信不通で。急に帰ってきて。ごめん。

深雪　ちょ(っとな)に言い出す(

ツグオ、土下座。

ツグオ ごめんなさい！

深雪、ツグオをひっぱりたたせる。

深雪 出たって！ください。

ツグオ ？

ツグオ、顔を上げ来客である新保の姿を見る。

神保が名刺を差し出す。

新保 おはようございます。株式会社ヒロシゲの新保です。

ツグオ、丁寧に名刺を受け取り頭を下げる。

ツグオ ご丁寧にすみません。ちょっと名刺を切らしてまして…。

深雪 バイトのアンタに名刺なんか無いでしょ。

ツグオ え？

ツグオ、ようやく状況を把握する。

ツグオ すいません！

ツグオ、タオルケットを持って慌てつつ、平静を装って出てゆく。

ツグオ 失礼いたしました！

ツグオ、去る。

深雪 すみません。お見苦しい所を。

新保 いえいえ。

深雪、新保をソファに促す。

新保 (笑い)じゃ、まあともあれ、さっそく見てもらいましょうか。

新保が持参のカバンを広げようとする(中には商談サンプルの菓子、駄菓子が入っている)。

深雪 ツグオのニオイがする。

新保 はい？

深雪 いえ。ちよつともやつとしません？

新保 ああ。…空気が落ち着くまでに(タバコのジェスチャー)一本行って来ていいですか？

新保、立ち上がる。

深雪 一緒、いきますよ。

新保 すわないですよね？

深雪 商品の話の前に、一件ちよつともめてまして。

新保 クレームですか？

深雪 うん。ちよつとヒロシゲさんにもお願いしなくちゃいけなくなるかもしれない。

転。

数時間後。

夕方、就業時間後の時間帯。

真澄が事務所にティカップをお盆に乗せてやってくる。

真澄、ティーカップを机に並べる。

帰り支度を終えた学が通りかかり二人に声をかける。

学 あれ？なにやってるんです？

真澄 お疲れ様。

学が部屋に入ってくる。

学 あ、コーヒーの入れ方の勉強ですか？

真澄 っいえ。

学 でもコーヒーカップ？

真澄 実験なの。

学 あ、橘さんの不思議なカンのあれですか！？

真澄、こくりとうなずく。

学 へー。

深雪がコーヒーマーカーのポットを持って入ってくる。

深雪 あったあった。これでいい？あれ？

学 あ、帰ろうとしたら、その偶然。

深雪 そう。

学 僕もお手伝いしましょうか？

深雪 そんな大変じゃないんでしょ？ちやっちやとやって私たちもすぐに帰るから。

学 そうですか？

深雪と真澄が手を動かしているのを遠巻きに見ている学。

学 今度、

二人、答えず作業を続ける。

学 お邪魔してもあれなんで、帰りますね。

深雪 そう？おつかれさま。

真澄 おつかれ。

学、去る。

深雪 ふふふ。

真澄 何笑ってるんです(笑)

深雪 今度、なんて言うつもりだったんだろうね。

真澄 さあ。

深雪 橋さん年下に厳しいよね。

真澄 一つ下でも子ども扱いです。

深雪 ははは。はああ。

真澄、じっと深雪を見る。

真澄 3.2ミリリットル。あ、いえ。

深雪 え？またため息？

真澄 あー。ごめんなさい。涙です。今日、久保田さんが流す。

深雪 え？

真澄 まあ、知らず知らず泣いてるんですけどね。人間は毎日。自然現象。

深雪 3.2ミリも？

真澄 1.5ミリリットルくらいですね。

深雪 倍？自然に長す涙の倍？ええ。

真澄 泣ける映画とか見るんじゃないですか？

深雪 ええ？んん…もー言わないでよ。

真澄 浮かぶとつい。ごめんなさい。

真澄、コーヒーメーカーのポットを持つ。

真澄 入れてきます。

深雪 あ。

真澄、給湯室に去る。

深雪 泣く？(ツグオにまつわることか?)。ハッ。ないない。映画映画。帰りにゲオ。うん。

グローブをはめた和夫とツグオが廊下を通りかかる。

その姿を見る深雪、ツグオと目が合う。

ツグオ 兄ちゃんごめん。ちょっと、すぐいくから。

和夫 うん。

ツグオ (深雪に)ちよつといい？

深雪 よくない。

和夫、去る。

ツグオ、事務所に入ってくる。

深雪 入ってくんな。

ツグオ 謝るだけ。

深雪 は？何を？

ツグオ 昼間、取引先の前でみっともないあれ。

深雪 それは社長に謝れ。

ツグオ さつきさんにも謝ったよ。

ツグオ、自分の頭をなでる(さつきからゲンコツもらったのを思い出した)。

ツグオ (なんて呼ぼうか考えた末)君にも謝らないと。

ツグオ、グローブを置いて深く頭を下げる。

ツグオ 「ごめん」。

真澄、ポットに水を入れてもどってくる。

深雪もツグオも気がつかない。

真澄、そっと部屋の隅に隠れる。

ツグオ …帰ってきてすぐ謝らなくちゃ、いや、ほんととは帰ってくる前に、だったんだけど。

コメン。

深雪 どうしてずっと帰ってこなかったんだよ。

ツグオ 後ろめたくて。深雪、深雪でいい？

深雪 …いいけど。

ツグオ 深雪にあわす顔がなくて。

深雪 12年だよ。

ツグオ 最後に会ったのは東京で10年くらい前じゃ…いや、細かいことはいいいね。うん。「めん」。

深雪 なんで？

ツグオ なんで？

深雪 ほかに好きな人できた？

ツグオ 違う違う。

深雪 やになった？私のこと。

ツグオ いや。

深雪　　なんで？

ツグオ　　なんで…んん。

ツグオ、考える。

ツグオ　　連絡とらなくなった頃だろ？んん。仕事すげえそがしくってさ。

深雪　　うん。

ツグオ　　うん。

深雪　　で。

ツグオ　　え？仕事すげえ忙しくって。

深雪　　それだけ！？

ツグオ　　考えられる理由は？うん。忙しくて。あーメール返すのわすれた。あー一週間たっちゃった。このヤマこえたら連絡しような。んんって思っているうち…

深雪　　音信不通？

ツグオ　　あ、うん。1年たっちゃったなあ5年たっちゃったなあ。で10年？

深雪　　なんだよそれ。

ツグオ　　ほんとにゴメン。

深雪　　なんだそれ。それで10年？

ツグオ　　早いよなあ10年で…。

深雪　　20代の10年だよ？

ツグオ　　ゴメンなさい。

深雪　　責任とってよ。

ツグオ　　あ。うん。

深雪　　え？

ツグオ　　ほんとに取り返しのつかないことをしてしまったと。深雪には。うん。だからなんでも言っつて。あ、出てけつて言っつのはなしで、いや、出て行くでもいいけどちょっとだけ待って。何ヶ月か…

深雪　　結婚して。

ツグオ　　うん。いいよ。

深雪、涙が出る。

深雪、涙を拭う。

深雪 ツグオなんかと結婚したくない。

深雪、涙を拭う。

深雪 ツグオなんかもう好きじゃない。

ツグオ うん。

深雪 10年も、私は何をまっていたんだろう。

深雪、去る。

ツグオ あ。

真澄が姿を表す。

ツグオ、真澄を見る。

ツグオ わあ。

真澄 ここはどちらかと言えば平良さんの方がイレギュラーだと思います。

ツグオ え？

真澄 聞くつもりはなかったんですよ。

ツグオ ?あ、ああ。

真澄 ツグオさんでいいですか?ここには平良さん姓の方がいっぱいいらっしゃるのよ。

ツグオ どうぞ。えつと橘さん。

真澄、ティーカップを並べながら。

真澄 久保田さん、ずっと彼氏いないみたいですよ。

ツグオ え?...ああ。

真澄 罪な人ですね。

ツグオ そうなんですよ。

真澄 ほんとにずるずると連絡しなかったのが原因なんです?

ツグオ えつと...いや、恥ずかしながら。

真澄 罪な人だ。

ツグオ 浮気とかよりはいいんじゃないやありません?

真澄 私に言われましても。
ツグオ ふう。

ツグオ、イスに座る。

ツグオ 何してるんです？

真澄 輝美さん辞めるの聞いてますよね？

ツグオ 喫茶店やるんですしょ？信雄さんと。

真澄 旦那さんもご存知で？

ツグオ 信雄さんはさつきさんの弟だから。

真澄 あ、そうなんですか？だったら苗字？あ、

ツグオ そうなの婿に行ったの。

真澄 宮下さんになったんだ。

ツグオ こんな田舎で大丈夫かね？喫茶店なんて。

真澄 お二人の馴れ初めはご存知ですか？

ツグオ、首を横に振る。

真澄 輝美さんのご実家は喫茶店をされてたんです。

ツグオ そうだっけ？

真澄 だいぶ前にやめて。輝美さんはその看板娘だったそうです。

応接室に輝美と宮下信雄がやってくる。

涼子がお茶をお盆にのせてもってくる。

涼子 どうぞ。

輝美 涼子ちゃんありがと。

涼子、去る。

事務所

ツグオ 信雄さんお客さんだったの？

真澄 旦那さんの一目惚れだったと輝美さんはおっしゃってます。

ツグオ あはは。お店なくなっちゃって、ウチで働くようになったのか。

真澄 喫茶店の再開が輝美さんの夢でした。旦那さんも良く知っている夢。

ツグオ へえ。

真澄 それで私頼まれたんです。

ツグオ ？

真澄 輝美さんと旦那さんがこれからあとどれくらいコーヒーを飲むのか。
ツグオ ……うちの母親が飲む酒の量もみてくれたそうで。

真澄 お酒お好きな方なのに今後飲むアルコール量があまりに少なくて、それで検査をおすすめしたんです。

ツグオ そうでしたか。

真澄 3238.4リットル。

ツグオ はい？

真澄 輝美さんが今後飲むコーヒーの量です。

ツグオ ああ。輝美さんの飲む量。さんぜん…？

真澄 3238.4リットル。コーヒーカップ一杯が160ミリリットとして20240杯。

ツグオ 2まん

真澄 365日毎日2杯飲んだとして約27年分、毎日5杯飲んでも11年分。

ツグオ はあ。飲むなあ輝美さん。コーヒー。

真澄 問題なのは旦那さんです。

ツグオ 信雄さん？

真澄 はい。旦那さんが飲むコーヒーの量は

ツグオ 何千リットルとか！？

真澄、用意していたカップに水を注ぎ始める。

真澄 1.4リットルです。

ツグオ ん？

真澄 正確には1.412リットル。ミリで1412ミリリットル。

真澄、カップ9杯に水を入れおわる。

真澄 カップ9杯にちよつと足りないくらい。

ツグオ それって何年分…？

真澄 一日2杯で4日分強です。

ツグオ はあ。

真澄 病気でコーヒーが飲めなくなる…とつてあると思います？

ツグオ あるのかな？あんまり聞かないけど。コーヒー俺今あんまり飲まないけど1ヶ月に9杯くらいは飲むよ…っていうと信雄さん…どっ…

真澄 事故の可能性もありますよね。

ツグオ え？信雄さん死んじゃうの？

真澄 どう伝えたらいいでしょうつかねえ？

ツグオ ええ？

ツグオと真澄が去る。

応接室

真澄がやってくる。

真澄 すみません。お待たせしました。お仕事のあとでお疲れのところを。

輝美 こちらこそ。ごめんね。それからいろいろ。

真澄 いえ。(信雄に)ご無沙汰をしています。

信雄、ペリりと頭を下げる。

真澄 さっそくですみません。ご依頼受けました件、さっそくですがよろしいでしょう

か？

輝美 はい。

真澄 今からお伝えする数字、量は明確なもので、残念ながら努力や運で変更できるたぐいのものではありません。予測ではなくて、絶対の数字と申してください。それがわかることに、それをお伝えすることに意味があるのかと言われることがあるのですが、私は意味があると思っています。

輝美 なんだか怖いわね。

真澄 今からお伝えする数字が宮下さんご夫婦の人生を豊かにするものだ。私は信じています。

輝美 はい。

真澄、信雄をみる。

信雄、うなづく。

真澄が二通の封筒を取り出し、輝美と信雄の前に一通ずつさしだす。

真澄 この中にお二人がこのさきの人生で飲むコーヒーの量を書いています。

輝美と信雄、目の前の封筒を手にとり、中から文章の書かれた紙を取り出し見る。

輝美 20240杯！??え??2まん2ひゃく??ちよつとちよつと(笑)(これ何年かかるの?)

真澄 一日一杯毎日飲んだとしたら55年ほどです。

輝美 え??55年て??

真澄 一日2杯で27年ほどです。

輝美 ああ。それでも、まあ飲むね私(笑)

信雄、自分の結果をまじまじと見た後、大きく息をはく。

信雄 そうか。

輝美 どうだったの?ねえ?

信雄 うん。

真澄 わかってらしたんですか？

信雄が真澄を見る。

真澄 依頼を否定しなかったのは……結果が想像できていたから、ですか？

輝美 え？なに？どついうこと？え？何杯飲むの？

輝美、信雄の結果が書かれた文章を手にとり見る。

輝美 9？…ん？ん？ん？

信雄 9杯分くらい。

輝美 そんなことある？二人で喫茶店するのよ？私9杯なんて多分一日で飲む。…病気？

信雄 ……。

輝美 何。

信雄 うん…。

輝美 何なの！

真澄 結果がわかることが不幸なことばかりではありません。

輝美 病気？黙ってたの？

信雄 ……。

ツグオが応接室に顔をだす。

ツグオ あのお。いこ？

だれも答えない。ツグオ、否定されなかったので部屋に入ってくる。

ツグオ いい？実は聞こえてて。

ツグオ、天井を指差す。

ツグオ ちょっと思い出して。いい？

真澄 今はちょっと。

信雄 いや、

信雄、「ツグオに話させてやって」というような表情。

ツグオ、うなづく。

ツグオ 子供のころさ、信雄さんよくスキーつれてってくれたじゃん？毎年。いつだったか

輝美 え？

ツグオ 言いそびれたの？

信雄、うなずく。

輝美 はあ？……あっきれた。

信雄 喫茶店始めるのに言わない訳にもいかないと思ってた。だから

信雄、真澄を見て。

信雄 ちょうどよかったんだ。

輝美 (目に涙をためながら) あーあ(笑)だまされたく。

信雄 ……ごめん。

輝美 ばかみたい(笑)

転。

その夜。

応接室で開かれている飲み会。

テーブルの上には缶ビールとツマミ(乾きものがほとんど)。

参加者はツグオと、新保と学、荒井の4人。と、真澄。

真澄は今はトイレにいつている。

新保 待ってたんだよツグオのことをさ。深雪ちゃん。

新保、ツグオ、の肩に平手。

ツグオ 新保さん、ほぼほぼ初対面ですよね？

新保 ツグオはまじめだねえ。

ツグオ 変な感じ。高校のダチ。実家の取引先、いとこ。学なんて前にあったとき小学生だったぞ。

学 へへへ。株式会社たいら名物「平良飲み」ですよ。

ツグオ 急にこえかけて、なにこの集まりのよさ。

このあたりで、真澄、事務所にふらふらと入り、自分の席で缶チューハイを飲み始める。

新保 橘さんからの誘いや、こない訳には。ねー。

学 ねー。橘さんからってないですよね。

新保 で？その橘さんはどこいったの？
学 トイレですかね？
新保 今日、橘さんなんかいいよね？
学 あ、大輝さんも思いました。
ツグオ そうなの？
荒井 ちょっと酔っぱらってるでしょ？今日。
新保 うん。
ツグオ つよいんだ。橘さん。
新保 つよいつていうか、自分の適量以上は飲まないから。普段は。
学 メスシリンダー。
新保 隙がなくてね。
学 大輝さん彼女いるっていつてませんでした？
新保 どうだったかなあ？
ツグオ んな。近場で。
新保 近場しかねえんだよ田舎には。

新保、ツグオを揺する。

新保 田舎に帰ってきてひと休み、なんていいよねえ。あ、嫌みじゃないよ。
ツグオ え？
新保 俺はそんな思いきったことできないなあ。
ツグオ ああ。
新保 でも思ってたのとは違うでしょ？
ツグオ いや、うーん。もっと居場所が無いかと思ってたけど…案外優しいよみんな。
荒井 久保田は？
ツグオ (笑)でも俺、刺されてもしょうがないと思ってたから。
新保 ツグオはまじめだねえ。
荒井 お、戻った。話が。
ツグオ いい人いなかったの？君とかあなたとか。
学 はい。俺、やります。久保田さんと結婚して株式会社いたら、継ぎます。好きです
久保田さん。
荒井 こないだは橘さんて言ってなかった？

学、廊下の方をちらっとみてのち

学 橘さんも…好きですねえ。どっちにしたらいいと思います？
新保 選ぶのは君じゃないからね。
学 え？

ツグオ、トイレに行くために部屋を出る。

涼子がお盆に餃子をのせてやってくる。

涼子 はい餃子。おまちー。

新保 どうもすいませーん。

学 俺だします。

学、300円を渡す。新保早速一つ食べる。

涼子、テーブルの上の開いた皿やスナックの袋を片付けつつ

新保 涼子さんも好きだよね学は。

学 涼子さんはだめですよ。人妻ですから。好きですけど。

荒井 ええ？

学 俺、こーう。女の人の二の腕が好きらしいんですよ。

涼子 なになによ。酔っぱらいの相手はしないぜ？

涼子が去る。

ツグオ、事務所に真澄がいるのに気がついて事務所に入る。

ツグオ 戻らないの？

真澄、ツグオを見て、何も言わず缶チューハイを飲む。

真澄 ふふ。

ツグオ こっちで飲むのは禁止じゃない？

真澄 内緒にしておいてください。

ツグオ めずらしいんだって？橘さんが酔っぱらってるのって。

真澄 リットルが上がってますね。

ツグオ え？

真澄 それをいうならメートルだろう？ですよ。

ツグオ え？

真澄 いいです。もう…。

真澄、ツグオをじっと見る。

真澄 2003ミリリットルもねー。

ツグオ ん？

真澄、首をひねる。

ツグオ 何の量？
真澄 えっと。

この辺りで涼子が帰りがけに事務所をのぞき、二人に声をかける。

涼子 あっち、そろそろヤバイよ。

ツグオ え？

涼子 ぐでぐで。

ツグオ あー。わかりました。

真澄 涼子さん。水、水用意しておいて。

涼子 ん？

真澄 コップ一杯。197ミリリットルくらい。

涼子 くらいっていうにははつきりした分量だね。なに？

真澄 酔っぱらいに飲ませてやることになりますから。今晚。

涼子 え？ほんとに。そっか。ちょっと覚悟しとく。

涼子、去る。

真澄 ふふふ。コーヒー嫌いだったんですって。なんだよね。それ。

ツグオ え？…ああ信雄さん？

真澄 信雄さんこれからは無理して飲まなくていいって。というか飲まないって。

ツグオ そうだろっね。

真澄 ふふ。ふふふ。それでも9杯飲むんです。信雄さん。この先、どんな時に飲むんで

しょうねコーヒー。

ツグオ なんでこういうことしてるの？

真澄 チューハイ？

ツグオ 頼まれて見てやって。金にもならないのに

真澄 最終的にはお金にしたいですね。

ツグオ そうなの？

真澄 自分だけの能力があって。それで誰かの人生に関われるなら。楽しいじゃないです

か？やるならそういう仕事がいいじゃないですか？

ツグオ だったらこんな田舎じゃなくて東京にでも出た方がいいんじゃない？

真澄 私、さつきさんに救われたんです。

ツグオ さつき叔母ちゃんに？

真澄 雇ってくれて。

真澄、うなずく。

真澄 ここの人たちは私を受け入れてくれました。大切な人のために自分のいくらかの

容量をつかうのはぶつうのこじやないですか？それに…

ツグオ

俺も一っ見てもどうっていいっ…

真澄

いいですよ？即答できるかどうかは保証しませんが。

ツグオ

久保田深雪に刺されて俺が流す血の量はどれくらい？

真澄

ん。

真澄、ちかづいてじっとツグオを見る。

真澄

ゼロですね。ゼロ。

ツグオ

そう。

真澄

久保田さんは刺したりしませんよ。

ツグオ

そう。

真澄

さされたいんですか？

ツグオ

後ろめたさの固まりみたいなのがさ刺したら吹き出したりしないかな？

真澄

吹き出しませんよ。刺して吹き出すのは血です。1800ミリ出血したらだいたい

死にます。

真澄、部屋をでていく。

ツグオ、その後をついて行くように部屋を出る。

真澄とツグオ、応接室に入る。

新保

橘さんどこ行つたの？。

真澄

結構飲みましたね？

学

はい！

学、手を上げ真澄の前に。

学

橘さんにお伝えしたいことがあります。

新保

お！なにになに？

荒井

あーあ。

学、持っている缶ビールを飲もうとする。

真澄

あ。学君。それ以上飲んじゃだめ。あと130ミリリットルで寝るよ？

学、缶ビールをあおる。

学、倒れそつになる。

ツグオが慌てて学を支える。

荒井 大丈夫？
ツグオ 寝てる。
新保 あらら。お開きにしますか？
真澄 そうしましょう。

ツグオと新保が学を抱えて去る。
真澄と荒井が缶やゴミを片付ける。
荒井、真澄去る。
ツグオが戻って来て応接室の電気を消す。

一時間ほどのち。
酔っぱらった深雪を荒井と和夫が応接室につれてくる。
荒井たち、ソファーに深雪を降ろす。
涼子がコップの水をもってやってくる。
涼子、深雪に水を手渡す。
深雪、ごくごくと水を飲む。

涼子 どこでつぶれてたって？
荒井 セブンの駐車場。
深雪 はあー。
涼子 ああ。これか。コップ一杯の水って。

涼子、もう大丈夫そうだからと、和夫に戻るようにながす。
和夫、うなずいてから去る。

涼子 珍しいね。外で飲むなんて。今日もねえ荒井君とか来てどんちゃんやったのに。
深雪、天井を見上げる。
涼子もつられて天井を見る。

深雪 ……ここだと、ツグオが居るじゃないですか。
涼子 ああ。そうだね。
深雪 あいつ…盗み聞きとかしてませんか？
涼子 え？

荒井、廊下に出て三階にのぼりかけ途中、ツグオのいびきを聞く。
深雪、水を飲み干す。

深雪 涼子さん。私ね。30までに子供が二人いる予定だったんですよ。
涼子 そっかあ。

荒井が帰ってくる。

荒井 イビキ聞こえた。ツグオ寝てる。

深雪 無駄な20代でしたよ。色で言ううとグレー。パステルカラーなし。仕事ばかり。

涼子 さつきさんの右腕だよ。深雪ちゃんいなかったらつづれちゃうよ、「たいら」は。

深雪 逆だとは思いますがね。

涼子 逆？

深雪 私たちがいるからさつきさんは「たいら」を続けてるんじゃないかな。コンビニや

スーパーくらいしか仕事がないんなら私が雇って育てようって。たいらが無くなっても他でつづしが効くようにしておこうって。

涼子 さつきさんぽいね。

深雪 ああやだな。こんな話。もっとほわっとしてたのにな。十八のころは。もっと漠然と生きてて、ツグオが手を引いて、クッハハハ…ないわー。ないない。

深雪、再び天井を見て。

深雪 …なにもなかったら私、ツグオをおいにかけて東京に行ってたと思うんです。私、こ

涼子 いいや。男が悪いんだよ。

深雪 そうですよ。ねえ！

涼子 うん。

深雪 アハハ。あーあ。さあ。ありがとございました。遅くにすみません。

涼子 大丈夫？

深雪 明日も仕事ありますから。

涼子 送ってください。

深雪 大丈夫ですよ。一時間も歩けばつきますから。

涼子 送ってください。荒井君も

荒井 サーセン。正直たすかります。

涼子 ちょっと支度してくるから、駐車場であってて。

涼子、コップを持って去る。

深雪 健太君ごめん。

荒井 ほんとだよ。セブイレブン寄って良かったよ。

深雪 じゃなくてさ。

荒井 何？

深雪 何年もまえにさ、その…好きだっっていってくれたことあったじゃん。

荒井 えっ…ああ。あったね。

深雪 ごめん。あのときはまだツグオのこと。

荒井　　いって。今更。ほんと今更やめて。

深雪　　ほんとごめん。

荒井　　ほんとにいいから。おかげで嫁さんと結婚したし、不思議だねえ。あのとき俺らつきあたりしてたらうちのガキども生まれてこなかったかもしれないと思うと…ぞっとする。

荒井、深雪の肩に手を当てる。

荒井　　過去のことより先のことを考えた方が健全だぞ。

深雪　　わかってるんだけどさあ。あ。も。

荒井　　ははは。

転。

8月中旬にさしかかるころ。
お盆の連休の二日目。

和夫と中村孝志がやってくる。

和夫、たいらの社内を案内しながら応接室に案内したという感じ。

和夫 ……こつちが事務所です。

中村 はあ。なるほど。

和夫 ……今は叔母のさつきが代表をやっています。

中村 はあ。なるほど。

和夫 ……父の妹にあたります。

中村 はあ。

ツグオがやってくる。

ツグオ あ、どうぞ応接室のほうへ。

中村 ありがとうございます。

三人応接室に向かう。
事務所の電話がなる。

ツグオ、戻って来て電話に出る。

和夫と中村は応接室へ。

ツグオ はい株式会社たいらです。あ、どうもいつもお世話になっております。久保田です

か？大変申し訳ございません、弊社は本日、お休みをいただいております…

はあ。不良の商品？

ツグオ、メモを取り始める。

ツグオ あ、わざわざお客様が？そうですか…それはお手数おかけいたしました。え？

商品の送り先？着払い？え？ふ菓子が入っていますよね？でしたら、そちらは処分していただいて。はい。次月の請求書で相殺させていただきますよ。はい。久保田にはその旨、お伝えしておきますので。はい。わざわざありがとうございます。失礼いたします。

ツグオ、メモを書き終わり、深雪のデスクにセロテープで張っておく。

ツグオ、応接室に向かう。

応接室。

和夫、ソファを進める。

中村 あ、失礼します。

中村、着席。

和夫も座る。

中村 いいところですネ。

和夫 古い事務所で

中村 山が近いですよネ。

和夫 ああ。

中村 子どものころはうらやましがられたんじゃないですか？
和夫 そうですね。

あかりが弘子の手を引いてやってくる。

あかり ゆっくりでいいから。

弘子 大丈夫だよ。

三人、応接室に入ってくる。

ツグオも合流。

弘子 ゴメンなさいね。狭いところで。

中村 いえ。面白いものを見させてもらいました。

弘子 面白いものなんかあった？

中村 駄菓子がいっぱいで。

弘子 ああ。そうか。私なんか見慣れちゃってるから。

和夫 どうしたの？

涼子 ん？ああ、坂上屋にしたのね。お昼。

ツグオ お。うなぎ。

あかり そんないいとこじゃなくていいっていったのに。

和夫 氷川亭は？

弘子 いっぱいなんだって。

和夫 氷川亭が？

涼子 ねえ。お盆だからじゃない？

ツグオ 和光とかは？久々にあそこのナポリタン食べたいな。

弘子 ナポリタンでわけいけないでしょよ。あかりが彼氏つれてきたんだからさ。そしてらもう坂上屋くらいしかないでしょうが。

あかり いいのにそんな。

ツグオ じゃ行くよ。さあ。

涼子 送迎バスくるから。

あかり おおげさなんだから。

涼子 お酒も飲まれるでしょうからお迎えにっつて。

ツグオ 余裕あるねお盆に。

弘子 今、うなぎ高いからね。飲んでちよつとでも落っことしてっつてほしいんですよ。

涼子 ま、そっついうわけだから、少々お待ちを。

ツグオ、立ち上がり、弘子をソファーに座らせようとする。

中村 あらためまして

あかり まつてまつて。紹介するから。

中村 ああ、はい。

あかり 中村君、ウチのお母さん。

弘子 あかりの母です。

中村 はじめまして。

あかり 会社の後輩の中村君。

中村 中村孝志です。

涼子 中村さんはあれ、あかりちゃんとはどっついった感じのおつきあいされてるの？

和夫が涼子を見て、あかりを見る。

あかり んーとね。

中村 結婚を前提にお付き合いさせていただいております。

あかり まーそんな感じ。

ツグオ へー。

ツグオ、和夫、涼子お互いの顔を見てうなづく。

弘子 よかったねえ。

あかり 喜んでよ。

弘子 え？喜んでるっつて。

あかり 和夫おにいちちゃん時は飛んでまわってたじゃない。

弘子 そりゃだつて。和夫は結婚できないもんだつて思ってたから。(和夫に)ねえ？

和夫 うん。

弘子 和夫のどっつて来てくれる人ならどんな醜女でも、しょうがない。私が我慢すればいいやと思つてつれてきたのがこの人だもん。やった！でしょ。

和夫 うん。

涼子 お母さん、和くん。もう、何も出ませんよ。

涼子、と、ポケットをさぐるとおまんじゅうが入ってたので取り出す。

涼子 あ、おまんじゅう出てきた。食べます。おまんじゅう？

弘子 いい。

涼子 じゃ、和君。はい。

和夫 ん。

まんじゅうを食べ始める和夫。

弘子 あんたはさ、器量だつて、お父さん似で悪くないしさ。

あかり 私お母さんが喜んで思つて。

弘子 あーうなぎ頼んどいた方がいいか。メニュー。待つよね向かうってから。

ツグオ うなぎだからね

涼子 じゃ、電話してきます。えっとコースは…

弘子と涼子が小声で密談。

涼子 はい。じゃそれで頼みます。

涼子、応接室を去る。

弘子が立ち上がる。

あかり どういくの？

弘子 今のうちにお花摘み。

弘子去る。

あかり は？何急に？

中村 あの、お手洗いですよ。

あかり ……

あかり、弘子を追いかけて去る。

弘子 なによ。

あかり いいから。

弘子 いいわよ。(中村さんと一緒に居なさいよ。

ツグオ、弘子とあかりが去ったのを確認したのち

ツグオ つかれない？

中村 は？

ツグオ 妹。

中村 いえ。

ツグオ 何かさ母親の為にってあせってるみたいで。プロポーズせかされた？

中村 いや、ははは。

ツグオ 実は頼まれた彼氏役だったり？

中村 やっぱわかりますか。

ツグオ ？え？

中村 はは。

ツグオ え？なに？頼まれた？

中村 はい。

ツグオ つきあってる？

中村 いえ。

ツグオ まじか。あいつ。

中村 ドラマみたいなことしますよね。

和夫 なに？

ツグオ つきあってないんだって。

和夫 ん？

ツグオ 彼氏じゃないんだって。

和夫 ん？

ツグオ あかりに頼まれて彼氏のふりしてるだけ。

和夫 ん？えっと。え？結婚？

ツグオ 結婚うんぬんの前に彼氏じゃないんだって中村さん。

和夫 彼氏じゃない？…じゃ、なんで？

ツグオ なんで？

和夫 なんでウチに？

中村 結婚するって言って、お母さんを安心させたいからって。

和夫 じゃあ

和夫、ツグオ、中村を見る。

和夫・ツグオ 妹がすいません！

二人、頭を下げる。

中村 いや、いいんです。いいんです。

和夫 あかりにはガツンと言いますから。

中村 お兄さんたちだけ知ってくれてるだけで。このまま行きましょ。行かせてあげてください。

和夫 貴重なお盆休みをこんなことのために。

中村 いいんですいいんです。嫌いじゃないんです。

和夫 彼氏のフリが？

中村 妹さんです。

ツグオ 嫌いじゃないんだ？

中村 はい。

和夫 なに？

ツグオ あかりのこと。

和夫 ん？

ツグオ そうか。ははは

中村 はいーははは。

和夫 何がおかしいんだ。

ツグオ ははおかしいよ。こんな。

中村 はい。ははは。

弘子とあかりが戻ってくる。

あかり どうしたの？

ツグオ いいね。中村さん。ははは。

中村 (笑)ありがとうございます。

あかり えっ、あ、そう？

和夫が立ち上がる。

和夫 あかり。

ツグオが和夫を引っ張って座らせる。

あかり 何？

ツグオ いや。ははは。

弘子 中村さんは出身はどこら？

中村 栃木です。

弘子 じゃあそんな遠くないね。大丈夫かな？なんとか。

ツグオ 行くつもりなの？

弘子 うん。なんか今さ、

弘子、一歩引いて4人が視線に入るように見る。

弘子 収まりがいいなと思って。

和夫 ん？

弘子 あんたたち、じっくりきたからさ。ちゃんとご両親にもご挨拶しないと。ご両親はご健在？

中村 あ、はい。

ツグオ 来てもらう感じじゃない？普通は、

弘子 そっか。和のときは涼子さんの実家いったもんね、一緒に。

中村 お兄さん。ちよっと一応順番がありますから、のらないで下さいよ。

ツグオ ごめん。

涼子が戻ってくる。

涼子 来ましたよバス。

弘子 ねえ涼子ちゃんちよっと。

弘子、涼子を和夫の隣に立たせる。

同様にあかりの隣に中村を立たせる。

弘子、引いて子供たちを見る。

弘子 うん。じっくり来る。いつぐらいにしようか？来月のお彼岸の連休は？

中村 ちよっと聞いてみましようか？

あかり な(に)いいだすの？(ま)ってま(ま)ってよ。

弘子、去る。

あかり、中村、弘子に付き添い去る。

ツグオ ははははは。

涼子 なに？

ツグオ バカだよ。実家を出た子どもって。突拍子も無くて。

和夫 …お前もそうだろう？

ツグオ うん(笑)さあうなぎうなぎ。

ツグオ、去る。

涼子 なに？

和夫、涼子の手をとり、共に去る。

転。

8月下旬の夜。

応接室。

ワインを持ったさつきがやってくる。

さつき、iPhoneを取り出し、iTunesで音楽を流し始める。

1970年代前半の歌謡曲。

さつき、ワインのキャップをあげる。

さつき、グラスを探すも見つからないので適当な湯のみをとりだし、湯のみにワインを
ついで飲み始める。

さつき はあ。

さつき、チーズをとりだしツマミにしてついでワインを飲む。

弘子がやってくる。

弘子 ふう。あああ。しんどい

さつき 大丈夫？体調どう？

弘子 きつい。

さつき 元気そうだけど？

弘子 だるくって。

さつき 見えない。

弘子 言っただけしょうがないからね。

さつき 義姉(おねえ)さんらしい。

弘子 痛さより放射線治療の方がいやだわ。

さつき そんなもん？

弘子、持って来た水筒からお茶をグラスに注ぐ。

さつき なにそれ？

弘子 ほうじ茶。ん。ブランドーみたいでしょ？

さつき どうなの告知とかされると？

弘子 眠れない夜もあるけどね。ハーフ、ハーフっていわれてるから。100%死ぬって
いわれたら…いや言われても自分が死ぬなんて思わないのかもね。たぶん明日死
ぬって言われても。

輝美と信雄がやってくる。

輝美　こんばんは。
弘子　いらっしやーい。
輝美　お呼ばれしちゃいました。
さつき　輝美さんごぶさた。
輝美　まだやめて一月ですよ社長。
さつき　さつきにしてよ、もう。これからは。

さつき、輝美にワインを注ぐ。

さつき　ノブ、冷蔵庫から自分で好きなもの出して。

信雄、冷蔵庫からビールを取り出してあげる。

輝美　それじゃ乾杯。

さつき　久しぶりに平良の兄弟集合に。

4人、杯を重ねる。

弘子　どう順調？開店準備。

輝美　ぼちぼち。大変。こたわったから。

信雄、親指と人差し指で輪をつくる。

輝美　いくらあってもたらないわ。

弘子　信雄君コーヒー嫌いだっただって？

信雄　んん。

さつき　ふふ。はははは。バツかだなあノブは。

信雄　……。

さつき　兄貴もそうだけどさ、ウチの男どもはしゃべんないよね。和夫もウチのも。

弘子　学君？それでもないんじゃない？

輝美　弁が立つほうじゃないよね。ごめん。

さつき　私もそう思う。ツグオぐらいい？

弘子　あれも何考えてるかねえ。

さつき　いろいろ考えてはいるみたいだね(笑)でもさ、でも何となくはわかるんだよね？じゃない輝美さん。ノブが考えてること。

輝美　まあ、そう思ってたんだけど。コーヒーはまさかね。

弘子　仲良くなった？

輝美　えー？

弘子　コーヒー嫌いなもの黙ってた理由聞いたあと。

輝美　いやだアハハハ。

弘子 やだってやだ。アハハハ。
さつき ハハハ。

弘子 いいわよねえ。私たちなんて、ねー
さつき ねー。私たちなんてね、「この」と「手すら握ってないね。
弘子 ねー。握ろうかさつきちゃん。
さつき いいのお姉ちゃん。

二人、手を握る。

弘子、ふと思い立って輝美と信雄とさつきを並ばせる。

輝美 なに？
弘子 ちょっと並んでみてよ。

弘子、並んだ3人を一步引いて見る。

弘子 うん。じっくりくる。

弘子、輝美の横にならび、

弘子 さつきちゃん。どう？私たち？
さつき え？

弘子 じっくりくる？血のつながりはないけど。

さつき ああ。うん。いいんじゃない？

輝美 社長。

さつき さつきでいいっつ。

輝美 さつきさん。いまだからいますけど。さつきさんの別れた旦那はなんか違うなっ
て思ってた。

弘子 そうー！じっくりしなかった。

さつき ああ。そうでしたか(笑)そうね。だからねえ。どうかいっちゃったね。

iPhoneから弘子にとって懐かしい曲が流れてくる。

弘子 (1フレーズ歌う)〜あれこれこんなテンポ早かったっけ？

さつき こんなもんでしょ？

弘子 もっとゆるーい曲だったじゃない？どこで聞いてたんだっけ？

さつき 兄貴が好きだったけど。

弘子 ああ。そうそう。あの人のカーステレオだ。テープのびのびで。結婚したの頃
だ。ふはは。

輝美 なんです？

弘子 一回大阪行ったことあるのよ車で、あの頃。お父さんこのテープだけしかもってな

くて延々くりかえし。

さつき 伸びのびだったねあのテープ。

輝美 新婚旅行？

弘子 仕事仕事。あれあれを仕入れに大阪の間屋まで。

輝美 なに？

弘子 カッチカチカッチカチカチカチカチカチカチっていうやつ。

輝美 何？

弘子 赤くて痛いの。

信雄 アメリカンクラッカー？

弘子 それそれ。

さつき あーあれは

弘子・さつき もうかったねえ。

弘子 大阪から仕入れたときも紐がついてなくて。それでもいいならって。帰って来てみんなで紐つけて。いやあれは儲かったね。

さつき あとあれ。

弘子 ヨーヨー？

さつき 凧。

弘子 ああ。

信雄 ゲイラカイト。

さつき・弘子 ゲイラカイト！あれも儲かったねえ！

さつき 売れたなあ正月。

輝美 昔は元旦なんて駄菓子屋しかやってませんでしたものね。

さつき お年玉はみんな駄菓子屋のものだったよ。

弘子 いい時代だったねえ。

さつき 儲かったよね。

輝美 (笑)さつきから儲かったしかいってないですよ。

さつき 仕事は儲かってなんぼ。儲かるにこしたことはない。

弘子 アハハハハ。

転。

数時間後。

応接室。弘子が毛布をかけられて眠っている。

ツグオが携帯電話をいじりながら様子を見ている。

弘子、目をさます。

弘子 ……ツグオ？

ツグオ 起きた？

弘子 輝美さんたちとさつきちゃんは？

ツグオ 帰ったよ。おばちゃん帰るときに呼ばれたの。

弘子 ああ。

ツグオ 飲んだの？

弘子 香りにあたったかな。

ツグオ 無茶しないでよ。

弘子 心配してくれるんだ？

ツグオ 当たり前だろ。

弘子 ふふ。

ツグオ、じっと弘子を見る。

弘子 なに？

ツグオ いや…なにかある？してほしいこと。

弘子 何？あんたお金ないの？

ツグオ はあ？

弘子 貸してもいいけど和夫には内緒だよ？

ツグオ 大丈夫だよ。そんなんじゃないよ。

弘子 何よ急に。熱でもあんの？体温計もってる？

ツグオ ないよ熱。

弘子 わかんないでしょうよ。私あれもってるから耳で計るやつ。P。P。P。ってすぐ終わるから。計り来なさい。

ツグオ 熱はないから？

弘子 じゃ、おなか？

ツグオ …(笑)ははは。

弘子 悪いもの食べた？あ、賞味期限切れのお菓子ばかりたべてるからでしょ？

ツグオ いや。(笑)おもしれえなって。

弘子 なに？

ツグオ 噛み合なくって。

弘子 歯か、歯が痛いのか。

ツグオ ハハハ…。

ツグオ、弘子に抱きつく。

弘子 なに？酔っぱらってるの？

ツグオ いや。

弘子 なにさ(笑)

弘子が、ツグオの背中をぼんぼんとたたく。

弘子 無理してこつち、いなくてもいいんだからね。

ツグオ ？

弘子 帰って来ただけで十分だから

ツグオ、弘子から離れる。

ツグオ マジでいつてるの？

弘子 私が死んでくのをそばで見届けられるよりは、遠くにいってもあんたが幸せなほうがいい。

ツグオ 近くにだって幸せがあるかもよ。

弘子、ツグオの顔を見て。

弘子 だーめ。あんたは一度ここを捨てたんだから、幸せにならないと帰って来ちゃだめ。

ツグオ ええ？

弘子 でも、お盆とお正月はちゃんと帰って来なさい。

ツグオ はあ。

弘子、歩きだす。

ツグオ 下まで送ってく。

ツグオ、弘子の手を引いて歩き出す。

ツグオ しばらくはまだ居るから。

弘子 はいはい。ありがとうね。

転。

9月上旬。

株式会社たいら事務所。

おのおのの席に座るさつきと真澄。

適当なイスに座っている新保。

立ちながら説明をする深雪。

深雪の手にふ菓子「杉田のふーちゃん」を持っている。

深雪 ハエが入っていたそうなんです。

さつき それ現物？

深雪 いえ、これは同じ商品の良品です。

新保 あけて、食べようとしたときにハエに気がついたそう。なので開封後に入ったって
いう可能性はなくてもないです。

さつき それ言ったってお客さん納得はしないだろうね。

深雪 販売したスーパー岡田は実際言っちゃったそう。火に油みたいです。

さつき 直接？電話？メール？

深雪 電話です。お客さんは福井の方で

さつき 福井？またなんともだね。

新保 観光でこちらに来ていて、たまたま買ったそうです。

さつき 返金と謝罪じゃ納得してくれないわけ？

ツグオと学が外回りから帰ってくる。

学 まじっすか？あかりちゃん。

ツグオ わかんねえけど。

学 そっか…。

二人、部屋に入る。

ツグオ重い空気に沈黙。

学 久保田さん。引き継ぎの件、やりませんか？

一同が学を見る。

深雪 ごめん。ちょっと日を改めてでもいいかな？

学 え？

さつき 私がやるよ。学、大丈夫だろ？

学 えっああ。そう。

さつき 出かける準備して。
学 はい。

さつき ええと？返金か？

深雪 ハエ混入の商品を送ってもらう代わりに代金を返金済みです。ただお客さんは原因の究明。岡田さんはふーちゃんの自主回収を求めています。

さつき そうか。

真澄 製造元の杉田製菓さんにどちらもお願ひするべきじゃないですか？ウチも被害者じゃないですか？

さつき それがスジなのはそうなんだけどねえ。

真澄 問題あります？

新保 杉田製菓は「杉田のふーちゃん」だけを作ってる会社なんですよ。70過ぎた杉田のおじいちゃんとおばあちゃんが。自主回収なんてなったら

さつき つぶれるかあ。

新保 倒産しますね。杉田製菓さん。

ツグオ 杉田のふーちゃん無くなっちゃうの？

新保 杉田のおじいちゃん平謝りでしたよ。廃業も考えてます。

ツグオ ええ？そんな人気あるじゃん。ふーちゃん。

新保 とまかく、ハエが入っていたという現品を回収して調査すればはつきりするんですけどね

さつき クレームの商品をスーパー岡田さんのパートさんが処分しちゃったのかあ。

ツグオ なにそれ、なに勝手にやってるの。

深雪 たいらさんに電話で確認した上で対応いたしましたということなんです。

深雪、ツグオが取ったメモを手にとって見せる。

ツグオ (すぐにはピンとこないものの思い出す)あ！俺……(さつきに)すみません！

さつき ……ポタンのかけ違いでことが大きくなるんだから気をつけてよ。

新保 商品があれば検査ウチでやりますよ。でもものがないんじゃないかあ

さつき ……どうしようかね。

深雪 なんとかしますよ。やりたい仕事じゃないですけど。

さつき うん。申し訳ないけど。

深雪 新保さん。ちょっといいですか打ち合わせ。

新保 はい。

深雪去り、新保応接室に向かおうとしてツグオをみる。

新保 悪く取らないでね。正直、ツグオさんがポカしてくれて助かったよ。

さつき 証拠がないんじゃないや追求もできないもんねえ。

新保 ウチはいいんですよ回収費用の半分くらい。そんなことより杉田のふーちゃんの

命を救ったんだよ。陰の英雄だよ。

新保、去る。

さつき (ツグオに) 嫌みの一つも言ってやんなよ。

ツグオ え? いやあ。

さつき (学に) さ、い、こ、う、か?

学 ちょっとまって。

さつき、去る。

学、慌てて資料を用意してさつきを追い去る。

ツグオ、イスに座る。

二人、仕事を続ける。

真澄 ここにいるのには自分の居場所ではない。

ツグオ ?

真澄 そんな風に思っているのかなと。

ツグオ うーん。

真澄 あと何度海に入ると思います?

ツグオ ?

真澄 海。一生のウチで。

ツグオ 何回だろ10回はないか?

真澄 突然の夕立をずぶぬれで走ることは?

ツグオ あったねえ高校くらいとき。これからか... たぶんない? あったとしても楽しそう

じゃ無いな。

真澄 すればいいんです。

ツグオ どうしてそんなにおせっかいなんです? メスシリンダーみたいなカンのせい?

真澄 透明なプールや風呂桶に水が入っているのを想像してみてください。

ツグオ ーんと。無重力の水みたいなの?

真澄 そうですね。

真澄、自分の頭の右上あたりの空間を指差す。

真澄 私のこのあたりにそんな水、見えます?

ツグオ 見えないけど

真澄 子供のころ気がついていたら、出会う人たちの頭の上には透明な水の固まりが見えま

した。みんな見えてると思ってましたけどそうじゃないんだと小学生になるころ気がつきました。

真澄、仕事を続けながら

真澄

母の作るクラムチャウダーが好きだったんです私。アサリのシチューって言うてましたけど。母が夕食のときアサリのシチューを私の前に置くととき、母の上の水の量が少しずつ減ってゆきました。ああこれってアサリのシチューの量なんだな〜ってなんとなく気がついていました。そしてある日、水が見えなくなりました。数日後、母は事故で亡くなりました。ああ。この水はそういうものなんだと初めて実感しました。

真澄

一度だけ生まれて一度だけ必ず死ぬんですから。すべての数はきまっています。まよう必要はないとおもいますよ。

真澄、送り状を持って事務所を出て行く。

転。

10月中旬の土曜日。早朝。

株式会社たいら事務所。

深雪、スーツ姿。

自分のパソコンでメールと資料を確認、プリントをかけようとしている。学がやってくる。やはりスーツ姿。道路地図を見つけ手に取る。

深雪 スマフォのカーナビアプリで行けると思うけど一応みておいて。

学 わかりました！

涼子が菓子折りの入った紙袋を持ってやってくる。

涼子 はいこれ、昨日買ったやつ。

深雪 すいません。

涼子、菓子折りとおつり、領収書を深雪に渡す。

涼子 領収書、「まえかぶの平良」でよかったよね？

深雪 はい。ありがとうございます。

涼子 がんばってね。

ツグオ、土曜日の朝なのに人の気配がするので自分の部屋から降りてくる

ツグオ。寝間着。

涼子、鉢植えが乾いているのに気がつき、水を汲みに行こうとする。

ツグオ 涼子さん？

涼子 おはよう。

ツグオ おはようござい、(事務所を覗く)あれ学？

学 おはよう。

ツグオ (事務所に入りながら)おはよう。

深雪 おはよう。

ツグオ スーツなんて土曜日に？

学 ちょっと福井までいってきます。

ツグオ 福井？

ツグオ、菓子折りの手みやげなどをみて。

ツグオ ああ。杉田のふーちゃんのクレーン対応か！。

学 そつです。

ツグオ これから？日帰り？

学 一応その予定です。

ツグオ そう、ですか。学はなんでいくの？

学 交代の運転手とボディーガードです。

深雪 いいって言ったんだけどね。

ツグオ …さつきさんが？

深雪 つれて行って。

ツグオ そうか。勝算は？

深雪 どうだろう直接あつて話してみて。それからだね。

ツグオ 搦め手か？

深雪 そ。それしか無いでしょ。現物がないんだから。

ツグオ 俺がいろいろか？学の代わりに。

深雪 バイトにやらせる仕事じゃないから。気にしないで。

ツグオ 気にしますよ。

深雪、パソコンを落とし、立ち上がる。

深雪、ツグオを見て。

深雪 じゃ、行ってきます。

ツグオ 行ってらっしゃい。

深雪、去る。

学 行ってきます！

ツグオ 事故んなよ。

学 はい！

学、去る。

ツグオ、なんとなく宙を拝む。

ツグオ 父ちゃん頼む。杞憂ですみますように。

涼子、コップに水を入れて戻ってきて、鉢植えに水をあげる。

涼子 二人もう出かけた？着替たら？朝ご飯、母屋に来なよ。

ツグオ あ、うん。

涼子 あかりちゃん。電車乗ったって。

ツグオ じゃあ屋前には着くね。

ツグオ三階に、涼子一階に去る。

転。

同日の正午ごろ。

株式会社たいら事務所。

喪服姿の輝美、信雄がやってくる。

信雄適当にイスに座る。

輝美はトイレに立つ。

あかりと中村がやってくる。やはり喪服姿。

あかり そんなニコニコしないでよ。

中村 あ、すいません。

あかり信雄に気がついて。

あかり おじさん。

信雄、軽く手をあげる。

あかり おじさん。中村君、これおじさん。

中村 ええ？（雑だなあ）中村孝志です。よろしくお願いいたします。

信雄、軽く会釈。

和夫がやってくる。やはり喪服。

和夫 どうも。

信雄 うん。

和夫、信雄のそばに座る。

輝美が手を拭きながら帰ってくる。

輝美 あ、和夫君、あかりちゃん！

あかり 輝美さん。ごぶさた〜。

あかり、輝美に抱きつくように近づく。

あかり 喫茶店どう？

輝美 ちょっと駄菓子なんか置いてるのよ。

あかり そうなんだ。

輝美 それで若い奥さん方が寄ってくれるんだけどちょっとね。想定と違う客層でね。

あ、彼が？

中村 あの中村孝志です。

輝美 あらーお噂はかねがね。やったねあかりちゃん。

あかり いやいやいや。

ツグオがやってくる。やはり喪服。ネクタイはしておらず手に持っているだけ。

ツグオ ああ、どうも。

輝美 こんにちは。

あかり ネクタイ早く閉めなさいよ。

ツグオ、中村を見て。

ツグオ あ。来てくれたんだ。

中村 もちろんですよ。

ツグオ 順調？

中村 どうでしょう？

ツグオ、信雄のそばに行き。信雄に声をかける。

ツグオ 信雄さんこんにちは。

信雄 ん。

信雄 夏の。

ツグオ ん？

信雄 コーヒーのときは悪かった。

ツグオ ぜんぜんぜんぜん。

ツグオ、信雄のそばで立っている。

ツグオ、ネクタイをしめはじめる。

信雄 お前、こっちに住み着くのか？

ツグオ んー。どうしようかなって。

信雄 そうか。

ツグオ どうしたらいいと思っつ？

信雄 …何でもいいんだよ。生きてりゃ。

ツグオ おじさんはうまい「」とやったじゃん。婿養子。

信雄　 そうだな(輝美をみて)あれが居ればどこでもいいだよ俺なんか。(和夫に)なあ？
和夫　 あ？うん。
ツグオ　 うわ。それ俺に言う？

さつき、遺影(大きなものでなくてし版のもの)と鈴を持ってやってくる。喪服とまでは行かないまでも黒を基調とした服装。

涼子が姿を表す。やはり喪服姿。
まだ姿は見えてないが弘子に手を差し伸べている。

涼子　 お義母さん。

涼子の手を取って、弘子がやってくる。鮮やかで落ち着いた着物姿。

弘子　 はあ、やっとついた。

輝美　 弘子さん素敵。どうしたの？

弘子　 13回忌なんてまあそんなかしこまらなくてもいいでしょ？お父さんも私の喪服なんて見たくないでしょうし。アハハ。なに着てもほめるような人じゃ無かったけど。
輝美　 そっかあ。

輝美、目尻をぬぐう。

和夫　 ぐっ。

和夫が涙をこらえる

さつき　 義姉さん。

弘子　 それじゃあ本日は故、平良豪さんの13回忌の法要にご参加いただきましてありがとうございます。これから…お墓に向かいますが、まずね。お父さんといえば会社なんですね。こっちを見てもらいたくて。じゃ、いいかな。

さつき、机に遺影を置き、鈴を鳴らす。

一同合掌。

弘子　 お父さん。今日はみんなに集まってもらいましたよ。12年経ちましたがみんな元気でやっています。和夫もツグオもあかりも立派になりました。ツグオはちょっとあれかな。今、夏休みちゆうかな。

一同、笑。

弘子 だけどまあみんな元気です。お父さんが始めた会社もほら見て。さつきちゃんはじめ、みんなのおかげでちゃんと続いていますよ。だからあちらでも安心していてください。まだ当分行きたくはないけど、そっちに行くときにはこの着物でいくからね。そのときはちゃんとみつけてね。

弘子。深く礼。

一同、それに続く。

多くの参加者が和夫の嗚咽に気がつく。

和夫 ぐっぐうぐうぐうひゅひゅ……。

弘子 ……和？なに？どうしたの？

涼子が和夫の元に。

涼子、そっとハンカチを和夫に手渡す。

和夫、そのハンカチで涙を拭う。

涼子、和夫によりそう。

弘子も和夫のそばに。

弘子 なあにこの子はアハハ。もう。いい年して。

和夫 うううう。う……。

弘子 私、綺麗すぎて泣けちゃった？

和夫、うなづく。

弘子 もーお兄ちゃんでしょう？ツグオもあかりも泣いてないでしょ？

涼子 (笑)先に下、行ってますね。

弘子 涼子さんお願いね。

涼子 いーうう？

和夫、うなづく。

涼子、和夫を抱えるようにして去る。

弘子 ありがとうございます。

さつき それじゃあ下に来ているバスに乗って。お墓のあとは坂上屋さんで席をとってますから。そちらで兄さんを偲びませう。

あかりが弘子に駆け寄る。

弘子　ありがとう。

あかり、首を横に振る。
中村も手を差し伸べる。

弘子　すいませんね。ツグ。お父さん頼める？
ツグオ　うん。

あかりと中村弘子の手をとり、連れ添いながら去る。
輝美、信雄、去る。

さつき、鈴を持つ。

ツグオ、遺影を丁寧に持つ。

さつき去り、ツグオ去る。

転。

11と同日の夜。19時ごろ。
応接室。

和夫、ツグオ、あかり、中村が駄菓子をつまみに飲んでいる。
あかり、ロングフルーツ（長いストローラムネ）を怒りながら食べている。

和夫　なんかごめんな。今日は。

ツグオ　何が？

ツグオが中村に新しい缶ビールを渡す。

中村　ああ、すみません。

和夫　あんな泣くとは。

ツグオ　うん。ほんと。

和夫　母ちゃんの着物見たらつい。

ツグオ　だよね。

あかり　結局、和夫お兄ちゃんにはかなわないんだ。

和夫　なにが？

あかり。ロングフルーツを食べながら別の駄菓子をあげる。

ツグオ　ラムネ食べてからにしないでよ。

あかり　私だってお母さんのためにいろいろ考えてるのに。

ツグオ　しょうがないよ。俺たちは家を出た人間なんだから。

和夫　なに？

ツグオ　昼間、兄ちゃん泣いたじゃん。あかり、あれ悔しいんだよ？な？

あかり、うなづく。

和夫　…なんで？

あかり　ああ馬鹿みたい。

和夫　ごめん。

あかり　なんであやまるの！

和夫、訳が分からずツグオを見る。

ツグオ　俺もあかりもさっし半年くらいでさ急にさ母さん恋しくなったわけ。家を捨てて出てったくせに。母さんに心配させて来たくせに。急に。むしがいいんだよ。ムシが

いい自分に腹が立つんだよ。な？

あかり バーカ。ツグオお兄ちゃんのバーカ。

ツグオ 帰ってくりゃいいじゃんか。

あかり そんな訳にはいかないの。

ツグオ だったら嫉妬すんなよ。

あかり ああ馬鹿みたい。

ツグオ 知ってる。

あかり なにー？

ツグオ 見返りをもとめるのがおこがましいんだ。自己満足だって自覚しろ。

あかり そんなこといわなくてもいいじゃない！

ツグオ (中村に)ごめんねー。

中村 いえ。

和夫 よくわからん。

ツグオ ムシがいいんだよ。

和夫 まあいいんじゃないか。

あかり 何が？

和夫 うん。

和夫、ビールを飲む。

あかり 早く言ってよ。

和夫 兄妹で。3人でこんな話初めてじゃないか？

ツグオ そういえばそうかもね。

あかり お父さんのときは？

ツグオ お前ずっと泣いてたじゃん。

あかり そうよ。だって中学生だったんだから。泣くでしょうよ。

中村 あの、席外しましょうか？

ツグオ え？

中村 兄妹水入らずで。

三人、手を振って否定する。

ツグオ いいのいいの。そんな、たいそうなもんじゃないんだから。

あかり 気にしなくていいんだから、あ、そうだ。ここだけの話なんだけど。お兄ちゃんたちには言っとくね。中村君、彼氏じゃないから。

ツグオ うん。知ってる。

和夫 うん。

あかり 会社の後輩にちよっとお芝居手伝って…え？知ってたの？

ツグオ (笑)うん、ねえ。

和夫 うん。

あかり いつから!?

ツグオ 最初につれて来たとき?

和夫 うん。

ツグオ だよね?

中村 はは(笑)…はい。

あかり ええ?なによそれ。ばらしたの?

中村 お兄さんたちだけには。

あかり信じられない!

ツグオ 信じられないのは俺たちのほうだよ。

中村 平良さんごめんなさい。

ツグオ あやまることないですよ。(あかりに)お前さ、中村さんがどんな気持ちでここに
でつきあってくれたかわかるか?

中村 お兄さん。大丈夫ですから。

あかり いやなら断ってよ、もう。

中村 いやってことじゃないんですよ。

ツグオ 嫌々でここまでつきあってくれないよ?

中村 お兄さん。

あかり なに?

ツグオと和夫が中村を見ている。

中村 ああ、もう。

中村、立ち上がりあかりを見る。

中村 平良さんに彼氏、婚約者ですか?の役を頼まれて、俺、僕?嫌じゃなかったですか
ら。こうして、お兄さんたちとも仲良くなれて、できればまた遊びに来たいくらい
です。

あかり そう、ありがとう。よかった。うん、くればいいじゃない?

ツグオ そうじゃなくてさ(笑)

あかり なに?

中村 僕ですよ。こうして言われるままにここに居るのはですね。

あかり うん。

中村 平良あかりさん。あなたが

あかり はい。

中村 あかりさん。あなたが…

あかり なに、なんなの?

ツグオ がんばれ!

和夫は見えていられなくて自分の顔を手で覆っている。

中村 平良あかりさんが、す(きだから)

あかりが中村の口をふさぐ。

あかり ちよつと、何言い出すの!?!?

ツグオ やつと気がついた。

和夫、顔を手で覆ったままうなずく。

あかり ええ?なんで?こんなところで!

中村 むぐぐ。

あかり、取り乱したようにあたりを見て。

あかり ちよつと下に行こう。

中村、口を押さえられたままうなずく。

あかりと中村、去る。

ツグオ ハハハ(笑)

和夫 大丈夫か?

ツグオ どうかな。

ツグオ、ビールを飲む。

ツグオ 母ちゃんの治療もあと4、5回だろう?

和夫 そうかな?

ツグオ 先生の話だと経過も思ったよりいいようだし。

和夫 うん。

ツグオ もうちよつとしたら東京行ってくるわ。

和夫 帰るのか?

ツグオ 帰るのは年明けかな?帰る前にいろいろ足場つくんねえと。部屋も仕事も決めねえと。

和夫 …残らないのか

ツグオ ずっと「たいら」でバイトってわけにもいかないでしょ?

和夫 …そうか。

事務所に深雪と学が帰ってくる。

深雪 ただいまー。あーあ。
学 おつかれさまでした。

応接室のツグオと和夫、声に気がつく。

ツグオ 帰って来たみたい。

和夫？

ツグオ 久保田さんと学。福井までいったの仕事で。

和夫 へえ。

ツグオ 兄ちゃん俺ちよつと行ってくるわ。

和夫、うなずき片付け始める。

ツグオ、テーブルの上のビールとミネラルウォーターを手にとり去る。

事務所。

深雪 学君今日はもういいから、疲れたでしょ？

学 平気です。

学、クレーム処理と長時間の車移動で疲労困憊。

深雪 平気じゃないから。

学 え？

深雪 早く帰って、明日ゆっくりして。また月曜日だね。

学 …平気です。

深雪 平気じゃないから。おつかれさま。

深雪、学を押し出すように帰らせようとする。

学が深雪の手を握る。

学 久保田さん。

深雪、学の手をほどぎ。

深雪 はいおつかれさま。

学、押し出される様に去る。

ツグオが事務所に顔をだす。

ツグオ お疲れ。

深雪 見てた？

ツグオ 何？

深雪 いいや。

ツグオ あんなだったっけ？俺らも200の頃は？

深雪、片手を上げて殴るようなポーズ。

ツグオ、防御するように両手を頭の上に。

深雪、手を降ろす。

ツグオ、ビールとミネラルウォーターを「どっち？」と示す。

深雪、ビールを取る。

和夫が顔を出す。

和夫 じゃあ。

ツグオ ん。

深雪 あ。おつかれさまです。

和夫、頭を下げ、去る。

深雪、ビールを開け飲む。

深雪 はあ。法事、無事終わった？

ツグオ まあ。それなりに。

深雪 ？

ツグオ そっちは？

深雪 ん？

ツグオ 杉田のふーちゃん。

深雪 ああ。

深雪、ビールを一口飲む。

深雪 会ってみたら気さくで正義感の強いおじいちゃんだった。

ツグオ お客さん？

深雪うなづく。

深雪 こっちの対応に納得してもらった。まあともかく大丈夫だよ。ふーちゃん。

ツグオ おお。やった。

ツグオ、ハイタッチのポーズ。

ツグオ ありがとう。ほんとごめん。いやーよかった。

深雪 ツグオが気をもむ必要なんてないのにさ。

深雪、ツグオの手を思いっきりたく。

ツグオ 痛って。

深雪、ビールをあおる。

ツグオ 深雪かっこいいよ。かっこ良くなった。

深雪 なにそれ。

深雪、ツグオの手をたたき続ける。

ツグオ 痛い痛い痛い。

深雪、ツグオの両ほほを両手でぱちんとたたきそのままぐるぐると頭をまわす。

ツグオ 痛い痛い。

深雪、ツグオの頭を動かすのをやめ、そのままじっと見つめる。

ツグオもじっと深雪を見る。

深雪、ツグオを突き放す。

ツグオ 非常に勝ってな話だけど俺、深雪と仲直りしたい。

深雪 勝手だね。

ツグオ だよね。

深雪 いいじゃない嫌いなままで。取り返しがつかないことだっていっぱいあるじゃない。

ツグオ わかるよ。

深雪 ずっと胸にためとけばいいじゃない。そっちの方が簡単でしょ？

ツグオ 簡単だと辛いんだよ。

深雪 許してほしいだけじゃない。許されて楽になりたいだけじゃない？

ツグオ うん。ごめん。でもこうして会って話ができるなら。やり直したいとは言えないけど。

深雪 言えないの？

ツグオ 言ってもいいの？

深雪 やだね。

ツグオ 会えなかったら謝る「ごめん」もできないからな。「こうして会えてるんだから。

深雪 ……ああ。もう。だからって…

弘子がやってくる。

弘子 深雪ちゃん。お土産ありがとね。いいのにくどろだったあっちは？雪降ってな
かった？

深雪、弘子の声に気がつき、弘子を迎えに行く。

弘子 あれ？ツグオ？あら。

弘子、深雪の手をとり

弘子 あんたたちよりをもどしたの？

深雪 もどしてません。

弘子 えー。あんたたちはわりと収まりがいいのになあ。

ツグオ ごめん。

弘子 まったくないの？戻す気は？

深雪 まあ、もうだめなんです。お互い。

弘子 ああそう？そうかあ…深雪ちゃんごめんね。私がいろいろ言うから、他を探しにい
けなかったんだよね。ずっとごめんね。

深雪 弘子さんお願い聞いてもらえます？

弘子 何？何でも言うて。

深雪 本当に申し訳ないんですけど…許せって言ってもらえますか？

弘子 なに？

深雪 ツグオ君を許してって。ほんと申し訳ないですけど…

弘子 そんなことでもいいの？いいわよ。深雪ちゃん。ツグオのこと許してやって。

深雪 ……はい。ありがとごさいます。(息をすって)弘子さんにそいわれちゃ、しんう
がないなあ…(涙が出る)いいですよ。…ゆ……………ゆるしてあげます……………
……………ツグオのこと許します。

深雪、両目を押さえるようにして泣く。

弘子 深雪ちゃん。

弘子が深雪を慰める。

ツグオ、二人に対して。深く頭を下げる。

転。

1月末。

株式会社たいら、就業時間終了後。

事務所ではさつきと真澄が帰宅の準備をしている。

真澄 くしゅん。

さつき 風邪？

真澄 ではないと思いますけど。汗をかく量が急に増えたりはしないので。

さつき 便利だね。あいかわらず。

真澄 社長こそ気をつけてくださいね。今日、お飲みになるでしょう？

さつき わかる？

真澄 社長、今日は1、24リットルワインを飲まれます。約2本ですよね。

さつき 家飲みだから。まあ。

真澄 気をつけてくださいね。

さつき はい。

さつき、じっと真澄を見る。

さつき 真澄ちゃん。

真澄 はい？

さつき あなたが来てちよつど一年だっけ来月で。

真澄 ああ。そうかもしてません。

さつき そろそろか。

真澄 そうですね。すいません。

さつき もっとさ、頼ってくれてもいいんだけどな。

真澄 十分お世話になってますよ。

さつき そっか。

真澄、うなづく。

大きなカバンを持ったツグオがやってくる。

ツグオ おばちゃん。

さつき ああ。なんだまだ居たの？

ツグオ 20時すぎのバスだから。いろいろお世話になりました。

さつき 寂しくなるね。

ツグオ またまた〜。

さつき まあしつかりね。じゃ、お先に。

真澄 おつかれさまでした。

さつき、片手を上げて去る。

ツグオ 辞めちゃうの？

真澄 もう少し減ったら。ですね。

ツグオ ?

真澄 4.62リットル。

ツグオ 4.ん？

真澄 事務所の鉢植えにあげるお水の量。4.62リットル。14回くらい。この先、さつきさんと飲むワインの量681ミリリットル。だいたい5杯とちよつと。輝美さんのお店で飲むコーヒー492ミリリットル。3杯分。ゼロになる前に別ればいつか再会を期待できるでしょ？

ツグオ 予想に従う人生って言うのはどうなの？

真澄 それしかしりませんから。

ツグオ そつか。橘さんも居場所が見つかったらいいね。いや、見つけてね。

真澄、持っている500ミリリットルのペットボトルのミネラルウォーターを何口か飲み、量を調節してからツグオに見せる。

ツグオ ?

真澄 2803ミリ。ツグオさんに初めて会ったときにツグオさんの頭の上に見えてた液体の量です。

ツグオ はあ。あれ何かのとき聞いた気がする。何の量なんです。

真澄 戸惑いました。最初。

ツグオ ?

真澄 私があなたのために泣く涙の量です。2803ミリリットル。

ツグオ え？ほんと？

真澄 あなたの為に泣く量であってどんな風に泣くかまではわかりません。恨んで流す血の涙かもしれない。

ツグオ うれし泣きかも

真澄 あなたが死んでから流すくやし涙かもしれない。

ツグオ なんてそんなネガティブな涙ばかりいうんです。

真澄 今でも戸惑っているからかもしれないですね。

ツグオ ともかく俺の為に泣くんですか？

真澄 それは、まちがいない。

ツグオ そうか。それはちよつと楽しみですね。

真澄 そう…ですか？

涼子と弘子がやってくる。

涼子、片手に大きな紙袋。もう片方で弘子を支えている。

弘子 よかった。まだ居た。

ツグオ 何？

弘子 涼子さん。

涼子 これ、おいなりさん。あとおやきとおせんべい。

ツグオ こんなに？

弘子 バスで食べなさい。

ツグオ こんなに食べられないよ。

弘子 全部なんていってないでしょ。

ツグオ うん。了解。

弘子 こたつで寝たら風邪引くから気をつけてよ。

ツグオ 大丈夫だよコタツないから。

弘子 え？送ってやるうか？

ツグオ いいよ。

荒井と深雪がやってくる。

荒井 おまたせ〜。

ツグオ あれ？

ツグオ、深雪を見る。

荒井 下でつつ立ってたからさ。

弘子 深雪ちゃん

深雪 弘子さん。

深雪、弘子の手を取る。

ツグオ ありがとう。

深雪 ちゃんと連絡しなさいよ？

ツグオ え？

深雪 弘子さんによ。

ツグオ ああ。

荒井 んじゃそろそろ。

ツグオ ん。

ツグオ、カバンを担ぐ。

荒井がツグオの紙袋をもってやる。

ツグオ それじゃあ。

ツグオ、弘子の前で両手を広げる。

ツグオ、カバンを置き、ふざけたように装って弘子とハグ。

ツグオ それじゃあね。母ちゃん元気だな。

涼子 ははは。

ツグオ はは。

ツグオ、弘子と離れ、カバンを背負い直す。

ツグオ それじゃあ行ってきます。

弘子 行ってらっしゃい。

涼子 行ってらっしゃい。

深雪 さよなら。

涼子 ええ？(笑)

真澄、軽く頭を下げる。

ツグオと荒井が去ってゆく。

深雪、なんとなく、車まで見送るつもりで部屋を出ていこうとする。

涼子 んー？

深雪 今日、満月じゃなかったかなって？

涼子 そう(笑)？

涼子、弘子を見る。

涼子 いいんですか見送り？

弘子 いいわよ。寒いし。

深雪去る。

涼子 すぐ帰って来ますよ。

弘子 そうね。お彼岸の頃？帰ってくるかな？

涼子 電話しますよ。メールも。なんなら会いに行きましょうよ。

弘子 そうね。

深雪が戻ってくる。

深雪 月、綺麗ですよ。見に行きませんか？

真澄 満月？

深雪 満月じゃなかった。でもいいお月様。雲一つなくて。

涼子 (笑) どうします？

弘子 もう一回、顔みとくか。

涼子 そっしましよ。

弘子 ゆっくり部屋を出てい「う」とする。

涼子 がよりそい深雪ともども三人去る。

真澄、ペットボトルの水を飲むとして、少しだけ考えてやめ、キャップを「キュッ」つとめめる。

真澄、部屋のあかりを消して去る。

転

了